町民参加の町史づくり

竹富町史だより

第53号
2024年２月28日

竹富町教育委員会
沖縄県石垣市美崎町11－1
TEL（0980）87－6257

目　次

台湾・国立交通大学客家文化学院所蔵
「植松明石資料」の台湾調査に参加して……（米盛恭子）…1

新城島に関する資料……10

資料紹介……23
(1)　古藤實富「惨状の黒島を訪う」〈1948年〉
(2)　「一九六〇年会務書」〈大原公民館〉
(3)　斜里町と姉妹町盟約に関する新聞資料〈1972年〉

書評「『竹富町史だより』〈第52号〉を読んで」……（三枝大悟）…33

斜里町からの寄贈資料一覧……34

2023年度寄贈図書一覧……41

2023年度購入図書一覧……44

《デンサ節》とその背景……45

燐鉱石の権威 波照間燐鉱で頓座・幕引き ……（西前津松市）…55

パジィラの両義性……（西前津松市）…59

2023年度竹富町史編集日誌抄……60

第46回竹富町史編集委員会……62

竹富町既刊書……67

編集後記……68

〈表紙の写真〉パナリワラバーズ（撮影・提供／黒島一雄）

新城島の黒島家４人姉妹によって結成された「パナリワラバーズ」は1960年代後半から1980年代にかけて活躍した楽団。メンバーは黒島一雄・小夜子のワラバーたち。長女・三致子の三線を中心に、次女・稔子はサンバ（三板）、三女・郁子は太鼓を、そして幼い四女・徳子はタンバリンを持ち、八重山民謡だけでなく沖縄民謡、宮古民謡まで披露した。「大原祭り」の余興のために結成されたというが、その後も結婚披露宴など、さまざまな祝宴やイベントに引っ張りだこ。一家が石垣島に引っ越してからは、石垣島名蔵の土地公祭などにも出演。西表島大原での活動は自前の衣装だったが、石垣島での活動は衣装も作らせていたほどだという。

黒島礼美「パナリワラバーズの活動とその背景」（『竹富町史　第五巻　新城島』648頁）参照。

台湾・国立交通大学客家文化学院所蔵
「植松明石資料」の台湾調査に参加して

教育委員会　社会文化課
町史編集係　米盛　恭子

1．はじめに

2023年９月14日～18日の日程で、台湾・国立交通大学客家文化学院に所蔵されている「植松明石資料」（略称：植松文庫）の整理とデータベース化を目的として現地調査に参加する機会を与えていただきました。

今回の参加は、かねてより交流のあった、久部良和子氏からのお声掛けによるものだったのですが、「日本の研究者の資料が台湾の大学に寄贈されていて、竹富町に関する資料（新城島、竹富島、黒島など）も多くある。今後の町史編集に役立つ資料もあると思うので、一度見に行ってみないか」、「調査資料は将来的に地域史に利活用できるものとの期待もあるので、石垣市史、竹富町史、与那国町史の編纂にかかわる職員を中心に声をかけている」とのことで、正直どうして良いのか戸惑いの方が大きかったように思います。

［写真１］植松明石氏。客家文化学院の展示パネルより。

お声かけいただいてから数日後、偶然にも『八重山毎日新聞』（７月９日付）に、松田良孝記者の「台湾で植松氏の業績展　北部客家や新城の民俗調査」、「客家の伝統残す地域」の２つの記事が掲載され、女性文化人類学者「植松明石」のお名前や、台湾の客家民族、『沖縄新城民俗誌』について改めて知ることができました。

今回は、調査の代表者である山本芳美（都留文科大学）教授の台湾滞在の日程にあわせての訪問で、参加者の日程調整の結果、Ａ日程（９月１日～５日）に４人（通称Ａチーム－仲程玲・石垣市史編集係、山根頼子・八重山資料研究会、新里光宏・宮古島、久部良和子・元沖縄県公文書館職員）、Ｂ日程（９月14日～18日）に５人（通称Ｂチーム－久部良和子、加島由美子・元糸満市史編纂室職員、村松稔・与那国町教育委員会教育課長補佐、譜久嶺マリサ・与那国町史編纂室職員、米盛恭子・竹富町史編集係）が参加することになりました。

2．植松明石氏について

調査初日、現地でいただいた「植松明石年譜」（植松氏の助手をつとめていた川北千香子氏編纂）によると、植松明石氏は、1923年静岡県生まれ。慶應義塾大学文学部史学科卒。元跡見学園女子大学教授。1999年に民俗文化研究所を設立し代表となり、2001年秋の叙勲で勲四等宝冠章。2017年94歳で逝去なさるまでの間に沖縄島、伊平屋島、伊是名島、奄美諸島、宮古・八重山の先島諸島、さらには

台湾の各地を巡り、積極的にフィールドワークを行っていたことがわかります。

本町との関わりとしては、1960年の夏、新城島上地・下地調査を皮切りに、黒島、西表島大原、竹富島などの調査にあたっており、2017年には『沖縄新城島民俗誌「パナリ」その光と影』を発刊するなど、本町の民俗学研究に大きく貢献しています。しかし、発刊直後に他界しており、伊波普猷賞授賞が決定していたようですが著者が亡くなったために対象から外れ、幻の受賞となったとのことでした。

『沖縄新城島民俗誌「パナリ」その光と影』のあとがきに、「記述には先生のみずみずしい感性があらわれ、シマの生活のリアリティを伝えている」（加藤正春）。「無味乾燥になりがちな民俗誌を超えて人間の息遣いが聞こえるような文章をかける民俗学者」（鈴木正崇）と表現されているように、植松氏が訪れた時期の新城島の様子を想像しながら読み進めることができます。植松氏自身が見て、聞いて、歩いて、調べた島の記録が丁寧に書き込まれていて、写真、図、スケッチ、表が読み手の理解を深めてくれる１冊になっています。

竹富町では、すでに『竹富町史　第五巻　新城島』（2013年刊）が発刊されているのですが、当時は植松氏の『沖縄新城島民俗誌「パナリ」その光と影』の刊行前だったこともあってか、竹富町史の編集に植松資料からの引用はみられず、そのことについては惜しまれます。

［写真２］植松明石『沖縄新城島「パナリ」その光と影』（岩田書院、2017年）

３．台湾・国立交通大学客家文化学院への「植松明石資料」寄贈の経緯

［写真３］研究代表者の山本芳美教授。
今回の受け入れはもちろんのこと、植松文庫のあらゆる面で尽力されており、自身はイレズミ研究の第一人者として知られる。

植松氏の資料が、台湾の国立交通大学客家文化学院（以下、客家文化学院と略記）に寄贈された経緯について、今回の受け入れに尽力くださった山本芳美教授より説明がありました。以下、山本教授の説明と報告書からの引用を含めて経緯をまとめました。

2017年６月に植松明石氏が逝去した後、ご遺族（植松氏の甥、吉澤忠成氏）から「寄贈したい」との意思を受け、同年９月に台湾に渡った山本教授が、「台北の出版社・南天書局社長の魏徳文氏に打診、客家文化学院への受け入れが決まり、同月のうちに資料全点の送り出しをおこなった。その後、客家文化学院による基本台帳が作成され、資料の全貌が把握できるようになった。」とのことでした。

さらに、山本教授は「台帳を確認して改めて自覚したのは、植松氏による日本における調査資料が資料全体の９割（最終的には日本の写真が全体の７割、台湾の写真は３割近くあったと報告）を占めることであった。植松文庫内の客家関連資料、特に写真については客家文化学院において整理が可能なものの、日本人研究者も関与して整理するほうが詳細に地域や撮影時期などが判別できる可能性が高い。研究代表者（山本教授）と植松明石氏は45歳の年齢差があっ

て研究領域は異なるものの、研究地域は沖縄と台湾で重なっており、学部時代は植松が勤務した跡見学園女子大学で日本民俗学と文化人類学を学んでいる。資料収蔵に関する経緯も踏まえると、整理作業も引き受けるべきではないかと考え、本研究計画を着想した。」と報告しています。

その後植松資料は、2017年９月はじめに客家文化学院へ受け入れが決まり、客家文化学院では寄贈された資料を「植松文庫」と名づけ、整理してきました。2023年３月までに、計300万円以上の費用をかけて基本台帳や専用の収蔵室が準備され、資料の全貌が把握できるようになったとのこと。ここまでたどり着くまでに、多くの日本と台湾の研究者や関係者がご尽力なさったことが、山本教授のお話しから伝わってきました。

４．今回の調査内容と資料の分類について

先にも述べましたが、植松文庫の資料は主に沖縄と台湾関係の資料であり、2017年６月に植松明石氏が逝去した後、客家文化学院へ受入れられ、日本円で300万円以上をかけて基本台帳がつくられていることからも、ある程度整備されてきているという印象がありました。

資料は客家文化学院の校舎３階にある専用の部屋で管理されていました。部屋の奥は大学のサーバー室に通じているということで、空調の管理など良好だということでした。資料は１点ずつチャック式のビニールに入れられ、さらに属性に沿ってプラスチック製の収納箱に収納され、アングル棚に整理されていました。

［写真４］「植松文庫」室内には、棚が設置され、空調が効いている。分類ごとに整理され、プラスチック製の箱に保管されている。

山本教授の報告書によると、「送り出された時の資料は、大小57個の段ボールにさまざまな年代と形式のものが詰められていた」といいます。客家文化学院で整理が進められ2614件と確定した遺贈資料は、(Ｆ)映像・録音・写真記録、(Ｓ)出版物、(H)手稿、(Ｐ)複写資料、(W)私物、(Ｚ)その他・雑類に６分類され、「１件も漏らさず」各資料をビニール袋に詰め、整理番号を振り、148頁の暫定的な目録が作成されました。その後、基本台帳は以下の６分類に沿って編纂しなおされ、整理されているということで、私たちが到着した時には、山本教授の目録作成は、あと残り２箱ということでした。

（Ｆ）写真　Ｆ001～Ｆ007
（H）調査ノート・原稿類　H001～H010
（Ｐ）資料・コピー類　Ｐ001～Ｐ010
（Ｓ）印刷品ほか　Ｓ001～Ｓ013
（W）手紙類など　W001～W006

［写真５］資料の入った保存箱を別教室に移動させ、山本教授より作業の段取りなど説明を受けた。地図やメモなどが、ジッパー付きのビニール袋に保管されている。

（Z）その他・雑類　Z001～Z009

今回参加した私たちの役割としては、すでに登録された１箱分（F003・写真）の資料目録についてダブルチェックを行うチーム（米盛、譜久嶺）と、未登録の１箱（H003・調査ノート、原稿類）の目録入力作業を行うチーム（村松、加島、久部良）に分かれて作業することになりました。

エクセルで作成された資料目録のうち、「写真については、整理番号ごとに、『資料の種類、目的、大きさ、封筒・箱の有無、slide·nega の有無、封筒・album などの記載、撮影年月日、写真の枚数、色彩、地域、被写体・植松のメモほか、備考』の欄ごとに記入」されており、番号と内容を照らし合わせながら、チェックしていきました。

私たちが担当したF003の箱は、主にスライドフィルムと紙の写真が入っており、台湾の墓、婚礼、廟、儀式の料理などが写っていました。限られた時間の作業であったため、じっくり中身を確認するというより、目録に登録されている写真やスライドの枚数と、中身に間違いがないかに集中しました。

時折、H003の箱に「黒島の地図がある」ことや「新城島の豊年祭のメモがある」ことなどの会話が、別の作業チームから聞こえてきましたが、詳細に見ることはできませんでした。ただ、「竹富島の西盛佳美さんに関する取材メモ」が出てきた時は、懐かしいお名前に思わず「知っている方ですよ」と答えると、山本教授は「やっぱり地元の人が関わるとすぐに情報が得られる」と仰っていたことが印象的でした。私の記憶にある西盛佳美さんは、西表島の西部地区で子どもたちを中心に書道の指導をなさっていました。私にとっては小学生の頃からお世話になっていた書道の先生でしたが、竹富島の出身で、戦前は台湾で、戦後は八重山の各地で警察官として勤務。台湾で勤務されていた時に「霧社事件」に関わりがあったことから、植松先生の取材を受けたのではないかとのことでした。

［写真６］資料の確認をしながら、目録に記録する（奥左から）松村さん、加島さん、久部良さん。手前は、私と一緒にエクセルの目録と中身のダブルチェックを行った譜久嶺さん。

さらに、山本教授は報告書の中で、「写真としては、1950年代後半から1960年代の奄美・沖縄の写真が多く文庫に含まれていることが確認できた。今後利用する人の利便性を考え、撮影地域にタグをつけたところ、F006においては資料点数393点中、沖縄88点（主な撮影地は沖縄本島北部、伊是名島、久高島、来間島、宮古島、多良間島、石垣島、黒島、新城島、与那国島）、奄美大島と加計呂麻島16点、奄美か沖縄と推測される写真４点となっていた。1960年代初頭より八重山地方、特に新城島に重点をおく。60年代半ばからは、沖縄本島北部・奄美大島・加計呂麻島の調査も実施した。

植松氏の撮影写真は、宗教儀礼や葬制・墓制、御嶽にとどまらず、農耕、土地利用、家屋、船着き場、生活道路、店舗、運搬姿勢、子どもたちなど、村内の様子や日常生活の諸相を生き生きと撮影し

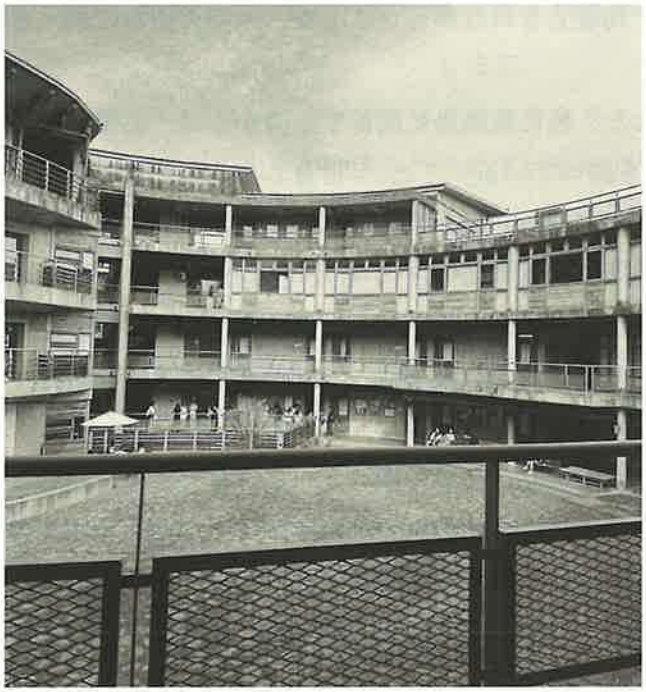
ていて貴重である。特に、1950年代から1960年代の調査は、住民のほとんどがカメラを所有していない『離島』を対象としている。さらに、解説がつけられている写真もあり、コレクションの中でも地元の人々にとって重要な写真をデータベース化して公開することは、各地における資料活用や研究還元につながると考える。当時、植松教授が赴いた地域は、ほとんどの家庭にカメラがない時代であり、非常に貴重な写真となっている。調査は、調査地が急速に旧来の文化から変容する時期と重なっており、写真と調査ノートを照らし合わせた解析が今後重要になっていると考える。」と述べています。

時間の関係上、他の資料を見ることはかないませんでしたが、私たちがチェックした箱の中に沖縄のスライド写真と、1960年代～1970年代の黒島のスライド写真15枚が入っており、枚数と内容を確認して袋に戻しました。古い写真のため、スライドの劣化が気になるものがいくつかあり、なるべく早い時期に、デジタル化した方がより良い状態の保存につながると思いました。

この日は山本教授の帰国により、作業は17時までしかできませんでしたが、皆このまま作業を継続したい気持ちで、資料に対しては心残りだったと話しながら終了しました。

5．より正確な資料の整備と活用に向けて

山本教授から、「今後は、沖縄県内や鹿児島県の奄美を中心とした博物館、公文書館や教育委員会などとの連携を模索すべきだと考える。客家資料に関しても同様であるがまずは植松文庫の整理を着実に進めることで、より東アジア研究および文化人類学にとっての学術的意義が明確になってくる」と報告された。とにかく、現段階では目録の完成度を高め、文庫の利用に向けて作業を進めているという様子でした。



［写真７］客家文化学院のキャンパス。円柱形の建物の中庭を囲むように教室や研究室が配置されている。客家伝統の建築様式をイメージしているそう。

作業を進める中で、台湾のスライドや写真に写された場所や内容などについて、私たちのようになじみのないものには特定することができず、日本人でも山本教授のように台湾に詳しい方でないと分類は難しいと感じました。同様に沖縄や八重山の写真を、なじみのない台湾の方が判別するのは困難な作業であり、より詳細な情報を得るためには、共同で資料整理にあたることが効率的だと思いました。資料の精度が高まることにより、資料の価値は上がります。このことは、他の資料にも言えます。多くの研究資料を共有の財産と考えることで、今後の研究の発展につながりますし、より多くの人に還元することができると思います。

しかし、一方では台湾の国立大学の予算で整備している事業であるため、国の財産という意識も高いことが強く感じられました。それは、客家文化学院内に掲示された資料や写真からもわかります。客家文化学院の回廊内にはパネルで作成された植松明石氏に関する写真や資料が多く掲示されていました。取材メモやノートが一目でわかるように工夫された掲示は、学生にとって価値のある教材とし

て扱われていると感じました。台湾にとって植松資料の価値が高く評価されているように、植松資料は沖縄にとっても重要な資料ということを、理解してもらえるように働きかけていくことが大事だと思います。

6．『植松資料』見聞報告を新聞に掲載して

［写真８］客家文化学院のキャンパス内の廊下には植松氏の写真や、取材メモノートなどが、学生たちの目に触れやすいように掲示されている。

台湾調査から帰国後、Ａチームの山根頼子さん、仲程玲さんとお会いして、今後について話し合いました。とにかく、これを機に何かアクションできたらと考え、与那国町教育委員会の村松稔さんを加えた４人で、『八重山毎日新聞』にリレー形式で「『植松資料』見聞報告」として、掲載（11月８日付・山根、10日付・仲程、14日付・米盛、15日付・村松）してもらえるよう、原稿を揃えました。提出期間は短期間ではありましたが、それぞれの立場で各々が感じたことをまとめることができたと思います。新聞掲載には重複する部分もありましたが、新聞で掲載しきれなかったことを、今回の原稿に加えさせていただきました。

新聞掲載を経て、多くの方々から反響がありました。特に新城島に関係する方からは、お電話をいただき、「島を離れているが故に、改めて島のことを調べている」こと、「自身や家族のためになればと思いながら調べている」ことをお聞きし、竹富町史の資料も紹介することもできました。また別の方からは「祖父が残した写真を、自分の代でどう伝えていくのが良いか考えている」こと、「植松明石先生のお名前や著書『沖縄新城島民俗誌「パナリ」その光と影』を知らなかった。すぐに買いたいと思っている」など、それぞれの立場で島との関わりを考えていらっしゃることをお聞きすることができました。

また、帰国後、新城島出身の方（1959年生まれ）が上地島について調べたいと竹富町史係を訪ねて来られました。新城郷友会主催の敬老会で挨拶をするために、島の歴史を再度確認しながら原稿を書かれるとのこと。『竹富町史　第五巻　新城島』や『上地小学校沿革史』（複製）などから調べられ、現在も行事や祭事の度に島で活動しており、幼少期の思い出や島の行事の様子など話していらっしゃいました。

印象に残ったのは、『新城島の古謡と祭祀』（西大舛高壱・登野原武著、2000年）を手に、「これまで口承でしか伝えられてこなかった島の古謡や祭祀が、文字として書かれたこの本は、宝物」と感慨深く話されていたことでした。お話しを聞く限り、ご自身の親の世代が植松先生の新城調査の時代と重なるのではないかと思いましたし、台湾から戻ってきた直後ということもあり、ご縁を感じました。様々な資料や証言を調べ、多方面から検証することで、当時の様子が生き生きと見えてくることを改めて感じることができました。また、島を離れて暮らす方々に資料が活用され、生活の中で使われることを実感する瞬間となりました。

調べたい、知りたいと思った時に資料を活用することができ、知ることができる。そこに資料の価値があると思いましたし、いつか使われる時のために準備しておくことも、私たちの務めなのだと改めて感じました。

7．『竹富町史　第五巻　新城島』の年表について

［写真９］『竹富町史　第五巻　新城島』（竹富町、2013年）

『竹富町史　第五巻　新城島』（竹富町、2013年）の年表に、「1969（昭和44）大学教員で新城島を調査している植松明石が来島し、上地校へ図書を寄贈する。」という１行を見つけることができました。『上地小学校沿革史』を調べてみると、「1969年８月６日（水）植松明石氏来島図書寄贈」の１行を確認することができたのですが、台湾でいただいた「植松明石年譜」には1969年に植松先生が新城島を調査した記録は見られませんでした。1960年～1965年までは毎年新城島の調査を行っていることから、もう少し調査が必要なのかもしれません。

このことを山本教授にお伝えしたところ、さっそくお返事をいただくことができました。以下、メールのやりとりを、整理して掲載します。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

（山本） 植松明石先生の助手をつとめていた川北千香子さんにメールの一部を転送したところ、以下のようなご指摘をいただきました。

（川北） 植松明石先生個人からの本の寄贈ではなく、跡見学園女子大学からの寄贈かと思われます。気になるのが下記の件です。

（米盛の引用）『竹富町史　第五巻　新城島編』の年表に、「1969（昭和44）大学教員で新城島を調査している植松明石が来島し、上地校へ図書を寄贈する。」を見つけることができました。『上地小学校沿革史』を調べてみると、「1969年８月６日（水）植松明石氏来島図書寄贈」と確認できました。

（川北） 植松先生は未だ1969年の時大学の教員ではありません。香蘭にお勤めでした。年譜に載っている履歴は間違ないです。跡見から直接もらったものです。教員になったのは1974年です。1969年は年譜では沖縄に行かれたかは載っていません。

（米盛の引用） 台湾でいただいた資料〈植松明石年譜〉には1969年に植松先生が新城島を調査した記録は見られませんでしたが、1960年～1965年までは毎年新城島の調査を行っていることがわかりました。

（川北） 植松先生は、1960年から1965年までは行っています。1960年に初めて八重山に渡った。1966年は宮古島諸島に行かれています。

以上が、山本教授を介して川北千香子氏と交わしたメールのやりとりになります。

疑問点は、「1969年（昭和44）大学教員で新城島を調査している植松明石が来島し、上地校へ図書

を寄贈する」という行の「1969年に植松氏が新城島を訪れたのか」という点になります。「植松明石年譜」に、1969年新城島を訪れた記録はありません。さらに、川北氏はその点とあわせて「大学教員」という部分についても指摘しています。

このことは、今後も継続して調査していく必要があると思いますので、今回は備忘録として書き留めておきたいと思います。

8．資料のデジタル化とアーカイブ

その他、山本教授からメールで、「(新城？) 島を出て団地住まいをしている風情の老夫婦と孫」という写真を見つけまして、この方がどなたかを知りたいと思っています。客家文化学院の写真デジタル化が進むことで、資料の共有がはかれると思います。」とのコメントもいただきました。実際の写真を見ていないので、どのような写真なのか分かりませんが、今後、写真が公開され、検証される時が待ち望まれます。

県内外でも、写真や資料のデジタル化が進み、アーカイブ事業が拡大しています。沖縄県公文書館の小野百合子氏は、『モモト』Vol. 52 (2023年1月発刊) の中で、「デジタル化してインターネット上で公開することで、場所や時間の制約を受けずに多くの方の利用を可能として、国内外における沖縄研究の発展に寄与することを目指しています」と述べています。デジタルアーカイブは、日々進歩拡大しています。植松資料を始めとした多くの資料が、様々な場面で広く活用されるためにも、地道で丁寧な作業が必要なのだと調査を通して改めて学ぶことができました。

今回、私たちは植松氏個人が作成し収集した資料の整理を目的に参加させていただきましたが、これらの資料を地域へ還元することも含め、さらにその先の世代に繋げるお手伝いができたらと思っています。

資料を介して、研究の対象となる地域や人やモノと、研究の成果をさらに発展させる人、生活に生かす人などさまざまな場面において、必要な時に必要な人に還元することができ、循環していく流れが構築できたら素晴らしいと思います。

また、台湾の大学と相互に作業する中で、お互いの信頼関係はもちろんのこと、技術的な面でも共有していくことは、植松資料の整理のみならず今後も多くの分野で役立つと感じました。

9．おわりに

山本教授の報告書にもありましたが、植松東アジア基金を中心に、都留文科大学の学外研究補完制度、国立民族学博物館のプロジェクトなど、資金面での調整にも苦慮している様子が伝えられました。

今回の調査は、竹富町の厳しい財政の中、教育委員会からの派遣として参加させていただきました。今後も作業への協力はもちろんのこと、互いに交流を深めていきたいと思いますが、個人としての関わり以上に、組織（竹富町や竹富町教育委員会）として参加協力する姿勢はそれ以上に大事なことだと思っています。資料の整理や公開に関わる財源の確保はもとより、人材の育成や人の繋がりや結びつきは、組織の力で持続して継続していくことも大切だと思うからです。

また、私自身は台湾について知らなかったことがあまりにも多すぎて気後れすることが沢山ありま

した。地理はもちろんのこと、日本や中国の統治など数々の歴史を乗り越えて築き上げられてきた台湾の文化、これまで幾度も目にしてきた西表島の炭鉱と台湾労働者との関わり、戦前戦後に竹富島から台湾に渡った方々のお話し、「霧社事件」や「牡丹社事件」や「二・二八事件」など、本や新聞や映像や写真を通してしか知り得なかった、処理しきれないほど多くの情報が、台湾に行くことにより、自分の中に一気に押し寄せて来たようで戸惑いました。

複雑な歴史から培われてきた多様性に富んだ台湾文化や、おおらかで気さくで親切な台湾の人々に接して、私は一気に台湾が好きになりました。台湾の全てを理解するには、まだまだ力不足なところもあると思いますが、これからも精一杯学んでいきたいと思います。

滞在中は、客家文化学院の簡美玲院長はじめ、黄紹恒教授、秘書の陳品安さん、葉明政さん、潘貞蒨さん、葉庭宇さんなど多くの方々にサポートしていただき、快適な時間を過ごすことができました。沢山の出会いに感謝の気持ちでいっぱいです。今回の繋がりを大切にしながら、今後の発展につなげていきたいと思います。

本稿をまとめるにあたり、川北千香子編纂「植松明石年譜」、山本芳美教授の「日本文化人類学会植松東アジア研究助成金研究助成事業　研究成果報告書」、「植松文庫整理報告（第二回滞在　2023年８月27日〈月〉～９月15〈金〉）」、植松明石『沖縄新城島「パナリ」その光と影』（岩田書院、2017年）を参考にさせていただきました。

新城島に関する資料

新城島に関する資料について、今後の検索の便を図り、『竹富町史　第五巻　新城島』（2013年発行）編集で参考とした資料を中心に、その後発表された資料も含め、発行年順に並べて示すことにしました。その際、次の目録も参考にしました。

・『竹富町関係文献目録』（竹富町、1990年）

・『八重山民俗関係文献目録』（石垣市、1995年）

また、新聞資料については、発行年（西暦）月日を８桁で表わし、（　）で括ることにします。例えば、2023年12月24日発行の『八重山毎日新聞』、2024年２月14日発行の『八重山日報』は、次のように表わします。

・『八重山毎日新聞』**(20231224)**

・『八重山日報』**(20240214)**

なお、基礎資料として、『竹富町勢要覧』『八重山要覧』がありますが、ここでは割愛することにします。

1888　沖縄県第一部庶務課「漁業」『沖縄県統計書　明治16年』（沖縄県）

1889　松原新之助「日本ニ於テノ儒艮」『動物学雑誌　１巻５号』（日本動物学会）

1895　黒岩恒「儒艮の漁場」『動物学雑誌　７（85）』（東京動物學會）

1904　「南海の宝庫八重山群島（四）」『琉球新報』

1906　「八重山離島の新城島小浜島（二）」『琉球新報』**(19061221)**

1911　比嘉重「八重山郡誌（三）」『沖縄毎日新聞』**(19110124)**

1912　「漁業組合登記公告」『琉球新報』**(19120512)**

1913　「八重山諸島第三節漁業ノ情報」『宮古郡／八重山郡漁業調査書』（沖縄県立水産学校）

1915　比嘉重徳「新城島・こえのはなぶし」『八重山の研究』（大城活版所）

1923　「民謡余滴（五）恋の花」『八重山新報』**(19230501)**

1930　「小学児童の納税観念」『八重山新報』**(19300525)**

1930　「見落勿れ小学児童の納税観念」『八重山新報』**(19300615、19300623)**

1930　「納税美談―在郷軍人会より表彰された竹富字新城出身の後備役陸軍歩兵曹長　島仲信英―」『八重山新報』**(19301025)**

1930　解説／宮良當壮、採譜／宮良長包「新城島の節・ユンタ（世願ひの歌）」『八重山古謡』〈第２輯〉（郷土研究社）

1931　「竹富村下地養蚕組合養蚕承認」『八重山新報』**(19310205)**

1931　「母校に対する美挙の数々」『八重山新報』**(19310515)**

1931　「農村巡り（二）」『先島朝日新聞』**(19310623)**

1932　「波照間、新城の視察を終え」『先島朝日新聞』**(19320518)**

1933　「孤島の新城に約十町歩の畑を墾く」『八重山民報』**(19330311)**

1934　「孤島苦を自力で克服」『先島朝日新聞』**(19340709)**

1936 「竹富村長選挙安里武信氏当選」『海南時報』(19310923)
1939 「字新城に共同販売店」『海南時報』(19390101)
1939 「新城校（上地）臨時休業」『海南時報』(19390129)
1939 「乳児検診黒島、新城終了」『先島朝日新聞』(19390924)
1939 「仲間南風見の開墾本年度より事業着手」『海南時報』(19391002)
1939 「南風見の移住開墾―新城字民移住熱望　支庁長一行現地視察―」『海南時報』(19391105)
1940 「西表島南風見に待望の模範農村！」『海南時報』(19400123)
1940 「〈西表島南風見開墾全貌〉総工費六十三万円耕地の均分調整へ」『先島朝日新聞』(19400203)
1940 「新農村建設へ驀進」『海南時報』(1940030314)
1940 「字新城出身安里一等兵」『海南時報』(19400610)
1940 石垣恒和「ぴんにきの歌―八重山新城の民謡―」（沖縄教育会『沖縄教育』〈第309号〉）
1941 「南風見出張所の人事決定発令さる」『海南時報』(19410302)
1941 「南風見出張所南進丸無事進水」『海南時報』(19410929)
1942 大浜信賢「八重山郡新城島に於ける「バンクロフト糸状虫の疫学的調査成績」」（『台湾医学会雑誌』台湾医学会）
1942 Don Wayne Fawcett「The amedullary bones of the florida manatee (Trichechus latirostris)」『American Journal of Anatomy Volume　71,　Issue　2』
1943 「竹富村の決戦貯蓄成績」『海南時報』(19430908)
1944 「南風見出張所長に塚越技師を任命」『海南時報』(19440523)
1944 須藤利一「八重山雑記・黒島・新城紀行」『南島覚書』（東都書籍）
1951 「圧倒的な日本復帰希望」『南琉日日新聞』(19510803)
1952 「石を耕す新城島―西表へ移住したい―」『八重山毎日新聞』(19520719)
1952 「新城島に大火か」(19521215)
1952 「大原航海船共進丸進水」『南西新報』(19521223)
1953 「煮え切らぬ新城島の人々―西表移住に難色―」『八重山毎日新聞』(19530207)
1954 八重山歴史編集委員会『八重山歴史』（八重山歴史編集委員会）
1955 「竹富青連歌成る」『八重山毎日新聞』(19550716)
1955 「新城に製糖場」『八重山新報』(19551221)
1957 「新城下地を牧場に」『海南時報』(19570624)
1958 「竹青連会報を発刊」『八重山タイムス』(19580523)
1959 「竹富町青連の陸上競技賑う」『八重山毎日新聞』(19590728)
1960 八重山地方庁『八重山群島概況　1960年２月』（琉球政府行政主席官房情報課）
1960 池間利秀「竹富町の島々（七）新城上地島(1)」『八重山タイムス』(19600708)
1960 池間利秀「竹富町の島々（八）上地島(2)、下地島(1)」『八重山タイムス』(19600709)
1960 池間利秀「竹富町の島々（九）下地島(2)」『八重山タイムス』(19600710)
1960 「東部西表点描（上）海鳥の島、上地」『八重山毎日新聞』(19600714)
1962 本田安次「新城島の巻踊り」「新城・小浜・竹富」『南島採訪記』（明善堂書店）
1963 「黒島、新城、鳩間の水輸送」『八重山毎日新聞』(19630516)

1964 住谷一彦「南西諸島の Geheimkult　新城島のアカマタ・クロマタ覚え書」（『石田英一郎教授還暦記念論文集』角川書店）
1965 「新城にも政治の目を」『八重山毎日新聞』(16950429)
1965 植松明石「新城島の年齢集団について」（『東京都立大学社会人類学研究会報』〈第２輯〉東京都立大学）
1965 「教え子ブランコ贈る 上地小 豊原校長のみやげ」『八重山毎日新聞』(196505256)
1965 植松明石「八重山・黒島と新城島における祭祀と親族」『沖縄の社会と宗教』（平凡社）
1965 植松明石「新城島の年令集団について」（『東京都立大学社会人類学研究会報　二』）
1966 「無人島を畜産の島へ 月平均千ドルの収入見込む 新城島にパナリ牧場」『八重山毎日新聞』(19660118)
1966 「新年度から新城島民の移住―竹富経済生活の向上図る―」『八重山毎日新聞』(19660201)
1966 「新城島の移住政策を強力に」『八重山毎日新聞』(19660202)
1967 喜舎場永珣「越城節」「クイヌパナ節」「離レマヌ前ヌ渡節」「世果報節」『八重山民謡誌』（沖縄タイムス出版部）
1968 牧野清『八重山の明和大津波』（私家本）
1969 琉球政府「沖縄県振興事業説明書」『沖縄県史〈第15巻〉資料編５　雑纂２』（国書刊行会）
1969 嘉手川重昭「新城（上）ぱなり焼きと美女」「生徒六人に一人の先生」『八重山毎日新聞』(19690718)
1969 「新城島で竜巻」『八重山毎日新聞』(19691004)
1969 朝日新聞社編『沖縄の孤島』（朝日新聞社）
1970 「新城島の突堤完成」『八重山毎日新聞』(19700307)
1970 喜舎場永珣「二月ジラバ」「ザントゥリユンタ」「大川原ヌピンニ木」「古見山ジラバ」「儀式ユンタ」「ナカヤマジラバ」「ハイキダユンタ」「ピヤンナ島ユンタ」「バーレー唄（爬竜船の古謡）」『八重山古謡〈下巻〉』（沖縄タイムス社）
1971 「数年先に大原へ―石垣島に移る者はいない―」『八重山毎日新聞』(19710910)
1971 大浜信賢「海馬―新城島の人頭税―」『八重山の人頭税』（三一書房）
1971 石垣市文化財調査委員会編「パナリ焼」『八重山の文化財』〈第１集〉（石垣市）
1972 牧野清「新城島」『新八重山歴史』（私家本）
1972 大城立裕『ぱなりぬすま幻想』（三笠書房）→1975
1972 「新城島「アカムタ祭祀」をめぐって座談会」『沖縄タイムス』(19720808)
1972 「新城島「アカムタ祭祀」をめぐって座談会」『沖縄タイムス』(19720816)
1973 JANET MITCHELL「Determination of relative age in the dugong Dugong dugon (M?ller) from a study of skulls and teeth」『Zoological Journal of the Linnean Society Volume　53, Issue　1』
1973 宮里千里「新城島上地の豊年祭」（『南島　パイヌスマ』〈No.1〉）
1974 竹富町誌編集委員会『竹富町誌』（竹富町）
1974 村山秀雄「プーリ」『八重山毎日新聞』19740801→1990
1974 「復元されたパナリ焼―東京の高城隆さん、八重山博物館に贈る―」『八重山毎日新聞』(1974

1002)
1974 植松明石「新城島の畑作」(『八重山文化』〈第２号〉東京・八重山文化研究会)
1974 東恩納寛惇「新城島」『南島風土記』(沖縄郷土文化研究会南島文化資料研究室)
1974 「パナリ焼」『日本のやきもの』〈Ⅰ〉(淡交社)
1974 武茂憲一「〈ルポルタージュ〉過疎化の島から―新城島―」(『新沖縄文学』〈No.26〉沖縄タイムス社)
1975 村山秀雄「上地小学校の廃校」『八重山毎日新聞』19750323→1990
1975 竹原孫恭「新城校の思い出」〈１－15〉(『八重山毎日新聞』19750326－19750417)
1975 平敷令治「新城島のアカムタ・クロムタ祭祀―上地のウフプール覚書―」(『沖縄国際大学文学部紀要』〈第３巻第１号〉沖縄国際大学文学部)
1975 吉田禎吾「シンボルと構造」(『文化人類学読本』東洋経済新報社)
1975 谷川健一「ぱなり焼の歌」『女の風土記』(読売新聞社)
1975 「そして誰もいなくなった―沖縄・上地島の宴のあと―」(『文芸春秋』)
1975 大城立裕『ぱなりぬすま幻想』(角川書店)→1973
1976 前花哲雄「パナリ牧場(上江洲安幸)」『八重山の畜産風土記』(私家本)
1976 安里武信『新城島(パナリ)』(私家本)
1976 「クイヌパナ」「タカニク」『竹富町の文化財』(竹富町教育委員会)
1977 「新城島」(沖縄歴史研究会『沖縄県の歴史散歩』山川出版社)
1977 村山秀雄「別天地ハナリ」『八重山毎日新聞』(19770506)
1977 「新城島」『竹富町の無形文化財』(竹富町教育委員会)
1977 「沖縄県振興十五ヵ年計画」(『沖縄県史〈別巻〉沖縄近代史辞典』沖縄県教育委員会)
1977 植松明石「新城島(パナリ)―その光と影１―」(『フオクロア　一』ジャパン・パブリッシャーズ)
1977 住谷一彦「南西諸島の Geheimkult　新城島のアカマタ・クロマタ覚え書」『南西諸島の神観念』未来社)
1978 新川明「新城島」『新南島風土記』(大和書房)→1987
1978 語り／安里武信「シィメーヌ・パー」「インツィキ屋のカニムル」(竹原孫恭編『ばが一島・八重山の民話』大同デザイン)
1978 竹富町制三十周年記念誌編纂委員会『町制三十年のあゆみ―町制三十周年記念誌』(竹富町)
1978 下嶋哲朗「新城島」『沖縄・聞き書きの旅』(刊々堂出版社)
1978 恩部昭利・正木元「新城島の蝶資料」(『八重山昆虫同好会会誌』〈第２号〉)
1978 植松明石「新城島(パナリ)―その光と影２―」(『フオクロア　二』ジャパン・パブリッシャーズ)
1978 植松明石「新城島(パナリ)―その光と影３―」(『フオクロア　三』ジャパン・パブリッシャーズ)
1979「陽光あふれるサンゴの海の牛の島―沖縄・パナリ島―」(『週刊朝日』)
1979 三木健「〈新刊紹介〉安里武信著『新城島(パナリ)』」(『八重山文化』〈No.７〉東京・八重山文化研究会)

1979 宮良賢貞「新城島上地の穂利と赤マダ・黒マタ」『八重山芸能と民俗』(根元書房)

1979 當間一郎「新城島のプーリ」(『八重山の民俗芸能(1)沖縄県民俗芸能悉皆調査 第1集』沖縄県教育委員会)

1979 NISHIWAKI, M., T. KASUYA, N. MIYAZAKI, T. TOBAYAMA and T. KATAOKA「Present distribution of the dugong in the world」『THE SCIENTIFIC REPORTS OF THE WHALES RESEARCH INSTITUTE №31』

1979 玉置和夫遺稿集刊行会『沖縄の植物と民俗 玉置和夫遺稿集』(玉置和夫遺稿集刊行会)

1979 宮良賢貞「新城島上地の穂利と赤マタ・黒マタ」『八重山芸能と民俗』(根元書房)

1980 Helene Marsh「Age Determination of the Dugong (Dugong dugon (M?ller)) in Northern Australia and its Biological Implications」『Age Determination of Toothed Whales and Sirenians』

1980 「新城島」『竹富町・与那国町の遺跡—沖縄県文化財調査報告書第29集—』(沖縄県教育委員会)

1980 谷真介「『パナリ焼』の謎」『伝説の旅』(創林社)

1980 琉球新報編「大原—「新城の節祭」再現—」『郷友会』(琉球新報社)

1980 後藤和民『縄文土器をつくる』(中央公論社)

1980 宮良當壯「琉球八重山諸島の民謡」『宮良當壯全集 11』(第一書房)『郷友会』(琉球新報社)

1981 『竹富町古謡集』〈第1集〉(竹富町教育委員会)

1981 山里純一「八重山新城島の節祭り歌謡」(『奄美沖縄民間文芸研究)』〈第4号〉奄美沖縄民間文芸研究会)

1981 酒井卯作「八重山郡新城島の節行事」(『南島研究』〈№22〉)

1982 『戦後八重山教育の歩み』(石垣市・竹富町・与那国町教育委員会)

1982 瀬戸弘「黒島、新城の海底水道」『竹富町の島々と共に』(私家本)

1982 真栄城守定「心残りの島じま パナリと鳩間」『八重山・島社会の風景』(ひるぎ社)

1983 牧野清「新城」(『沖縄大百科事典〈上巻〉』沖縄タイムス社)

1983 石垣繁「新城島」「新城島のプル」(『沖縄大百科事典』〈上巻〉沖縄タイムス社)

1983 加治工真市「新城島の方言」(『沖縄大百科事典』〈上巻〉沖縄タイムス社)

1983 森田孫栄「越城節」(『沖縄大百科事典』〈上巻〉沖縄タイムス社)

1983 内田詮三「ジュゴン」(『沖縄大百科事典』〈中巻〉沖縄タイムス社)

1983 新城剛「パナリ焼」(『沖縄大百科事典』〈下巻〉(沖縄タイムス社)

1983 石垣繁「『パナリ』考—『わかれじま』か『はなれじま』か—」『八重山日報』(19831203)

1984 新崎盛暉「孤島の豊年祭」『沖縄考—琉球弧の視点から—』(凱風社)

1984 新城公民館・美御嶽拝殿建築期成会『美御嶽拝殿落成記念』

1984 森哲・天野雅男・太田英利「八重山群島・新城島のトカゲ類の分布に関する新知見」(『沖縄生物学会誌』〈№22〉沖縄生物学会)

1984 H Marsh, GE Heinsohn and LM Marsh「Breeding Cycle, Life History and Population Dynamics of the Dugong, Dugon dugon (Sirenia: Dugongidae)」『Australian Journal of Zoology Volume 32 Number 6』

1985 登野原武「運命の五月三日—大舛支庁長と父の爆死—」(『市民の戦時・戦後体験記録—あのこ

ろわたしは—』〈第三集〉石垣市役所）
1985 冨田孫秀「戦時、戦後を食糧担当官として生き抜く」（『市民の戦時・戦後体験記録—あのころわたしは—』〈第三集〉石垣市役所）
1985 石垣市史編集室『写真記録　復帰十年誌—戦後のあゆみ—』（石垣市役所市史編集室）
1985 仲地哲夫「新城島村頭の日記及び解説」（『地域と文化』〈第31・32合併号〉南西印刷出版部）
1985 得能壽美「近世末期八重山農村の様相」（『沖縄文化』〈第65号〉沖縄文化協会）
1985 亀崎直樹「八重山群島新城島におけるタイマイ eretmohelys imbricate(linnaeus)の産卵場の新記録」（『沖縄生物学会誌』〈No.23〉沖縄生物学会）
1986 河邑厚徳「人魚島からサンゴの海へ」『ぐるっと海道３万キロ〈１〉沖縄・九州編』（飛鳥新社）
1986 「新城島」『角川地名大辞典　47　沖縄県』（角川書店）
1986 亀崎直樹「八重山群島新城島のアカウミガメ caretta caretta とタイマイ eretmohelys imbricate の雑種について」（『沖縄生物学会誌』〈No.24〉沖縄生物学会）
1987 三木健「パナリ島　廃校の軌跡」（『Coralway　1987年　１・２月号』日本トランスオーシャン航空）
1987 竹富町教育委員会『竹富町の文化財第４集　新城島（パナリ）下地の遺跡—分布調査報告—』（竹富町教育委員会）
1987 「新城島海底送電工事安全祈願祭」（竹富町史収蔵資料）
1987 植松明石「新城島　上地－下地　祭儀と神々」（谷川健一編『日本の神々—神社と聖地—』〈第13巻　南西諸島〉白水社）
1987 普請帳研究会『普請研究〈第22号〉技術の風土記　沖縄・竹富島の家造り』（普請帳研究会）
1987 新川明「新城島」『新南島風土記』（朝日新聞社）→1978
1987 植松明石「新城島」（『日本の神々—神社と聖地 一三　南西諸島—』白水社）
1987 増田和彦「新城島上地の来訪神」（『日本民俗学』）
1987 増田和彦「神々の行動伝承　八重山古見・小浜・新城・宮良の豊年祭をめぐって」（『野洲国文学』〈No.40〉）
1988 目崎茂和「パナリ（離れ島）の由来」『南島の地形—沖縄の風景を読む—』（沖縄出版）
1988 野底宗吉「村役場の移動、そして特設工兵隊」（『市民の戦時・戦後体験記録—附・関係資料—』〈第四集〉石垣市役所）
1988 金城朝夫『ドキュメント八重山開拓移民』（あ～まん企画）
1988 竹富町企画課『島じまのすがた　町制施行四十周年記念』（竹富町）
1988 野底宗吉『新城下地島の節祭ジラパ集』（新城下地島を守る会）
1989 高良倉吉「パナリの風」（『沖縄タイムス』〈夕刊〉19890131「根語り」→1995）
1989 石垣市総務部市史編集室『石垣市史　資料編　近代３　マラリア資料集成』（石垣市）
1989 『日本民謡大観（沖縄奄美）八重山諸島篇』（日本放送出版協会）
1989 古橋信孝「新城島のアカマタ祭祀」『幻想の古代—琉球文学と古代文学』（新典社）
1989 「新城島」『八重山古地図展—手描きによる明治期の村絵図—』（石垣市）
1990 『昭和回顧録—平成改元記念—』（沖縄人事行政調査会）
1990 牧野清「144　上地美御嶽（新城上地島）」「145　東御嶽（新城上地島）」「146　西御嶽（新城

上地島)」「147　下地東御嶽（新城下地島)」「148　下地西御嶽（新城下地島)」「149　はんぞう御嶽（新城下地島)」「150　神宿る御嶽（新城下地島)」「151　七門御嶽（新城下地島)」「152　はなやま（新城下地島)」「153　まらぱい御嶽（新城下地島)」「154　はなすこ御嶽（新城下地島)」「アカマター見学印象記」「新城島御嶽位置略図」「新城島のお嶽概説」『八重山のお嶽』（あーまん企画）

1990　村山秀雄「別天地ハナリ」『不連続線』（八重山毎日新聞社）→**197705**

1990　平敷令治「アカムタ・クロムター八重山・新城の豊年祭」『沖縄の祭祀と信仰』（第一書房）

1990　村山秀雄「プーリ」『八重山毎日新聞』→**19740801**

1990　村山秀雄「上地小学校の廃校」『不連続線』（八重山毎日新聞社）→**197503**

1990　「新城島」（沖縄県教育庁文化課編『沖縄県歴史の道調査報告書Ⅶ―八重山諸島の道―』沖縄県教育委員会）

1991　沖縄県教育庁文化課「ト．パナリ」『沖縄県文化財調査報告書第98集　西表島上村遺跡―重要遺跡確認調査報告』（沖縄県教育委員会）

1991　安里英子「新城島（上地島)」「新城島（下地島)」『揺れる聖域―リゾート開発と島のくらし―』（沖縄タイムス社）

1991　砂川哲雄「幻想の島―新城・上地島―」（『琉球新報』〈夕刊〉**19910703**）→**2007**

1991　本田安次「新城島のアカマタ・クロマタ」「新城島の結願祭」「新城島の節祭」『沖縄の祭と芸能』（第一書房）

1992　通事孝作「祭りへの思い」『沖縄タイムス』「唐獅子」欄（**19920109**）

1992　國學院大學日本文化研究所『南琉球新城島の方言』（國學院大學日本文化研究所）

1992　「恋の花」『琉球芸能事典』（那覇出版社）

1992　新崎善仁「〈パナリ〉民謡とその文化の背景」『八重山民謡の考察』（刊行委員会）

1993　「ザンのぱなり島―新城島―」『竹富町史別巻３　写真集　ぱいぬしまじま―写真にみる竹富町のあゆみ―』（竹富町）

1993　入嵩西正治「竹富島・黒島・新城島」『八重山糖業史』（石垣島製糖）

1993　通事孝作「《文化財探訪》―クイヌパナ―」（『竹富町史だより』〈第４号〉竹富町）

1994　比嘉賀盛「『沖縄古代土器』の作り方～失敗しないためのノウハウ～」（『あやみや』〈第２号〉沖縄市立郷土博物館）

1994　石垣市史編集委員会『石垣市史　各論編　民俗　上』（石垣市）

1994　亀川安兵衛「新城下地島の思い出」『越えた幾山河―傘寿・わが思い出の記―』（私家本）

1995　『陶磁器１　パナリ焼』（石垣市立八重山博物館）

1995　「二八〔兵事関係書類〕（明治三十三年)」（石垣市史編集委員会『石垣市史　八重山史料集２　豊川家文書Ⅰ』石垣市）

1995　記念誌編集委員会『創立五十周年記念誌　大原っ子』（竹富町立大原小学校創立五十周年記念事業期成会）

1995　高城隆「パナリ焼のことなど」『花綵列島―民俗と伝承―』（木犀社）

1995　高良倉吉「パナリの風」『切ない沖縄の日々』（ボーダーインク）→初出『沖縄タイムス』〈夕刊〉（**19890131**）

1995 高良倉吉「作陶師・大嶺實清」『切ない沖縄の日々』（ボーダーインク）→初出『大嶺實清土器展』〈パンフレット〉(1989)
1996 竹富町史編集委員会「島の概況」（『竹富町史　第十二巻　資料編　戦争体験記録』竹富町）
1996 大浜ミツ「空襲が始まりガマへ避難」（『竹富町史　第十二巻　資料編　戦争体験記録』竹富町）
1996 大浜ミツ「大原への避難」（『竹富町史　第十二巻　資料編　戦争体験記録』竹富町）
1996 大浜ミツ「平和の世の中が一番いい」（『竹富町史　第十二巻　資料編　戦争体験記録』竹富町）
1996 野底宗吉「村役場の移転と特設警備工兵隊」（『竹富町史　第十二巻　資料編　戦争体験記録』竹富町）
1996 大舛真昌「辛かった特設警備工兵隊の生活」（『竹富町史　第十二巻　資料編　戦争体験記録』竹富町）
1996 大浜良光「敗戦となった安堵感」（『竹富町史　第十二巻　資料編　戦争体験記録』竹富町）
1996 「表紙の写真：新城尋常小学校」（『竹富町史だより』〈第10号〉竹富町）
1996 盛本勲「ジュゴンの調理および食法」（『月刊考古学ジャーナル（409）』ニュー・サイエンス社）
1996 「新城島に伝わる狂言『くいぬうべー』25年ぶりに復活」『八重山毎日新聞』(19961111)
1996 「新城島の伝統狂言「くいぬうべー」25年ぶりに復活」『八重山日報』(19961112)
1996 『本底初子・大濱博起・大濱修姉妹公演 糸掛きてぃ―昔世ぬ謡心踊心―』〈パンフレット〉（姉弟公演実行委員会）
1997 竹富町古謡編集委員会『竹富町古謡集』〈第２集〉（竹富町教育委員会）
1997 植松明石「新城島の祭儀生活」（『宗教研究』）
1998 比嘉賀盛「土器製作からみた沖縄先史時代」（『史料編集室紀要　第23号』沖縄県教育委員会）
1998 通事孝作「むかし八重山21　廃校になった上地小学校」（『情報やいま』〈No.70〉南山舎）
1998 大田静男「琉球狂言」『文学　季刊（第９巻・第３号）』（岩波書店）
1998 琉球新報社編「新城島」『沖縄コンパクト事典』（琉球新報社）
1999 「《竹富町史編集委員会トピック》　新城島（上地、下地）史跡巡見」『竹富町史だより』〈第15号〉（竹富町）
1999 安本千夏「第８回　琉球だより　パナリ島。海の民の住む神高い島を知る日」（『アウトドアイクイップメント』〈vol. 42〉）
1999 安里精善「新城島の生活誌」（『八重山毎日新聞』19990727）
1999 崎原恒新「新城島」「新城村」「アラスウビ村」「クイ村」「越城村」「下地島」「ナァーシキ村」「ナハスク村」「パナリ」「フクバレー村」「フザトゥ村」「真栄里村」「ウイスク」「クイヌパナ」「サジ」「火番盛」「ポーン山」「東御嶽」「東嶽」「アカムタ御嶽」「西御嶽」「西嶽」「磯御嶽」「美嶽」「七門御嶽」「ナハスコ御嶽」「ナハヤマ御嶽」「はんぞう御嶽」「マラパイャ御嶽」「アラスク村跡遺跡」「ウイスク村跡遺跡」「ウブドウムル遺跡」「タカニク遺跡」「ナーメ村跡遺跡」「ナーシキ貝塚」「フクバレー村跡遺跡」「フザトウ村跡遺跡」「ポーン山遺跡」「マヒャン村跡遺跡」「インツキャヌカチムル」「大舛久雄」「牢屋大浜主」「石垣在新城郷友会」「石垣小学校」「上地小学校」「大原小学校」「大原中学校」「アカマタ・クロマタ」「ジュゴン」「パナリ焼」『八重山ジャンルごと小事典』（ボーダーインク）
1999 粕谷俊雄・白木原美紀・吉田英可・小河久郎・横地洋之・内田詮三・白木原国雄「1999　日本

産ジュゴンの現状と保護」（『プロ・ナトゥーラ・ファンド　助成成果報告書　第８期』日本自然保護協会）
2000　竹富町古謡編集委員会『竹富町古謡集』〈第３集〉（竹富町教育委員会）
2000　西大舛高壱・登野原武『新城上地島の古謡と祭祀』（私家本）
2000　植松明石「来訪神儀礼の成立をめぐる考察――沖縄・新城島の場合」（『民俗文化研究』〈創刊号〉民俗文化研究所）
2001　石垣金星、嵩原健二、花城良廣、加治工真市「西表島、鳩間島及び新城島における動植物の方言名について」（『西表島総合調査報告書―自然・考古・歴史・民俗・美術工芸―』沖縄県立博物館）
2001　山下欣一「新城島（パナリ）へ…　大いなる幻影として①」（『花礁』〈創刊号（春号）〉花礁編集室）
2001　「《写真に見るわが町》20　上地島―集落と民家」（『竹富町史だより〈第20号〉』竹富町）
2001　「『鉄田義司日記』補遺　新城島」（『竹富町史だより』〈第20号〉竹富町）
2001　黒島トミ「激しい空襲下で命拾い」（『大原創立55周年記念誌　栄光永えに』大原創立55周年記念誌作成委員会）
2001　池田信子「避難小屋での生活」（『大原創立55周年記念誌　栄光永えに』大原創立55周年記念誌作成委員会）
2001　池田信子「ビラで終戦を知る」（『大原創立55周年記念誌　栄光永えに』大原創立55周年記念誌作成委員会）
2001　登野原武「運命の５月３日　大舛久雄氏の最後」（『大原創立55周年記念誌　栄光永えに』大原創立55周年記念誌作成委員会）
2001　「座談会　大原創設当時を語る」（『大原創立55周年記念誌　栄光永えに』大原創立55周年記念誌作成委員会）
2001　瑞覧山昇「西表島のパナリ焼き」（『西表島総合調査報告書』沖縄県立博物館）
2002　HELENE MARSH, HELEN PENROSE, CAROLE EROS, AND JOANNA HUGUES『Dugong : Status Report and Action Plans for Countries and Territories』
2002　喜舎場孫正「インチキ屋のカニムイ」「パナリの武士の屋」『八重山昔話』（ミル出版）
2002　「學務書類綴（その二）　新城尋常小学校沿革」（『竹富町史だより』〈第21号〉竹富町）
2002　登野原武「資料にみる新城村の歴史点描」（『竹富町史　第十巻資料編　近代２』竹富町）
2002　仲地哲夫「近世中期における八重山諸島の村落と寄百姓―西表島東部の各村落と周辺離島との関係を中心に―」（『南島文化　第24号』（沖縄国際大学南島文化研究所）
2002　砂川哲雄「新城島とジュゴン（ザン）―その盛衰の歴史」（『情報　やいま』〈2002年８月号〉南山舎）
2002　得能壽美「史料に見るジュゴン（海馬）」（『情報　やいま』〈2002年８月号〉南山舎）
2002　「新城島」「新城村」「美嶽」『沖縄県の地名』（平凡社）
2002　『竹富町古謡集集』〈第４集〉（竹富町教育委員会）
2003　通事孝作「竹富町・島々の織物文化　織りの世界―新城島」（『竹富町史だより』〈第23号〉竹富町）

2003 宇仁義和「沖縄県のジュゴン　Dugong dugon　捕獲統計」(『あじまぁ　名護博物館紀要　11号』名護博物館)

2003 石垣久雄「人頭税（御用布上納）と女性」『あさぱな　人頭税廃止百年記念誌』(南山舎)

2003 西大舛高壱『南の島の物語』(私家本)

2003 『石垣在新城郷友会　家族名簿』(石垣在新城郷友会)

2003 小野まさ子「前近代・近代史料にみえるジュゴン補遺」(『ジュゴン史料調査研究集成（暫定）No.4』琉球自然史研究会)

2003 盛本勲「ジュゴン骨に関する出土資料の集成（暫定)」(『ジュゴン史料調査研究集成（暫定）No.4』琉球自然史研究会)

2004 『ジュゴンと藻場の広域的調査報告書　平成15年度』(環境省)

2004 野底宗吉「竹富町新城下地島の地図概要」(竹富町史収蔵資料）→20131130

2004 安里進・高良倉吉・田名真之・豊見山和行・西里喜行・真栄平房昭『沖縄県の歴史』(山川出版社)

2004 通事孝作「双子の島」(『琉球新報』「落ち穂」欄20041011)

2004 竹富町史編集委員会編「必要書類集」『竹富町史　第十巻　近代２』(竹富町)

2004 城間義勝「沖縄のミルク神に関する研究」〈修士論文〉

2004 大舛敏彦『父　大舛久雄』(私家本)

2004 「二二〇〔貢租免除・未納関係書綴〕(細布調整方御免除願ほか　明治三十四年　新城島)」(石垣市史編集委員会『石垣市史　八重山史料集　豊川家文書Ⅲ』石垣市)

2005 小倉剛・平山琢二・須藤健二・大泰司紀之・向井宏・川島由次「琉球列島におけるジュゴンの分布北限に関する聞き取り調査」(『野生生物保護　9（2)』)

2005 『竹富町古謡集〈第５集〉』(竹富町教育委員会)

2005 前花哲雄「②東部地区（豊原・大原・大富・古見・美原・高那・新城島)」(代表清算人・大山剛『かがやけ肉用牛―社団法人沖縄県肉用牛生産供給公社27年の軌跡―』社団法人沖縄県肉用牛生産供給公社)

2005 『ジュゴンと藻場の広域的調査報告書　平成16年度』(環境省)

2005 石垣市総務部市史編集課「ジュゴン（儒艮)」『八重山の動植物―その来歴・方言名など―石垣市史研究資料４』(石垣市)

2005 里井宏美「近代初期八重山・新城村の一農民の生活史―村頭「日誌」を手がかりに―」〈修士論文〉

2005 小倉剛・大泰司紀之・野底宗吉・仲盛敦・石垣金星・川島由次・須藤健二・内村真之・大塚沙織「ジュゴン奉納史跡―「七門御嶽」の石積みと奉納骨の現状―」『BIOSTORY vol. 4』(生き物文化誌学会)

2005 大泰司紀之「沖縄のジュゴン個体群とジュゴン漁の復元にむけて」『エコソフィア』〈15号〉(昭和堂)

2006 竹富町史編集委員会『竹富町史　第十巻資料編　近代３―新城村頭の日誌―』(竹富町)

2006 「《写真にみるわが町》26　新城島民の南風見移住」(『竹富町史だより〈第28号〉』竹富町)

2007 得能壽美『近世八重山の民衆生活史　石西礁湖をめぐる海と島々のネットワーク』(榕樹書林)

2007　竹富町史編集委員会『竹富町史　第十巻資料編　近代４』（竹富町）
2007　『石垣市史考古ビジュアル版　第１巻　研究史　八重山考古学のあゆみ』（石垣市）
2007　杉本信夫「新城（上地島）の古謡」（『八重山、与那国島調査報告書１―地域研究シリーズ No.34―』沖縄国際大学南島文化研究所）
2007　通事孝作「大原４Ｈクラブ」（『月刊情報やいま　2007年７月号』南山舎）
2007　砂川哲雄「幻想の島―新城・上地島―」『八重山から。八重山へ。―八重山文化論序説―』〈シリーズ・八重山に立つNo.３〉（南山舎）→**2007107**
2008　「上地村」「下地村」『石垣市史叢書16 北木山風水記』（石垣市）
2008　當山善堂「越城節（本調子）」『精選八重山古典民謡集１』（ティガネシア）
2008　竹川大介「ジュゴン」（『沖縄民俗辞典』吉川弘文館）
2009　安里武泰『時は命、心は水のように―人生の冬に思う―』（私家本）
2009　植松明石「新城島と西表島のつながり―人頭税・遠距離通耕・マラリア・西表島移住・沖縄戦・パナリに帰る・米民政府によるマラリア撲滅・再移住―」（『民俗文化研究』〈第10号〉民俗文化研究所）
2009　野底宗吉「ああ、ふるさと下地島」（『月刊やいま　2009年10月号』南山舎）
2009　Osamu Hoson, Shin-ichiro Kawada, and Sen-ichi Oda「Ossification Patterns of Cranial Sutures in the Florida Manatee (Trichechus manatus latirostris) (Sirenia, Trichechidae)」『Aquatic Mammals Vol. 35, Iss. 1』
2010　「聞き書き　野底宗吉さんの昔語り　あぁ、ふるさと下地島第７話　戦中、そして終戦直後」『月刊やいま　2010年１／２月合併号』（南山舎）
2010　下地安「第二の故郷　下地島」（『竹富町史だより』〈第31号〉（竹富町）
2010　『石垣市史考古ビジュアル版　第６巻　八重山の民間交易隆盛期　中森期―中国陶磁器・人口の急増―』（石垣市）
2010　登野原武「琉球王府の特命を受けたぱなりの人々」（『八重山歴史研究会誌―八重山歴史研究会発足三〇周年記念号―』八重山歴史研究会）
2010　島袋綾野「ジュゴンとその『皮』そして、『肉』」（『八重山歴史研究会誌―八重山歴史研究会発足三〇周年記念誌―』八重山歴史研究会）
2011　島袋綾野「パナリ焼―イメージの形成・制作・流通の謎」（『石垣市立八重山博物館紀要』〈第20号〉石垣市立八重山博物館）
2011　「八重山唄者の素顔―生活の中にある唄―」（『月刊　やいま』〈2011年４月号〉南山舎）
2011　『新城島・下地島「七門御嶽」奉納頭骨調査説明会資料』（やいまザン研究グループ）
2011　飯田泰彦「〈誘〉大浜安則ファーストアルバム発売記念公演『やいま歌の響き』」『八重山毎日新聞』
2012　通事孝作「新天地を夢見て移住」（『月刊やいま』〈2012年６月号〉南山舎）
2012　「八重山むかし語り」『やえやま GUIDE BOOK　[2012]』（南山舎）
2012　仲原靖夫「哀愁のパナリ」（『沖縄県医師会報』〈Vol. 48　No.８〉沖縄県医師会）
2013　通事孝作「寄宿舎での寮生活」（『月刊　やいま』〈2013年３月号〉南山舎）
2013　『竹富町史　第五巻　新城島』（竹富町）

2014 赤嶺政信「〈『竹富町史　第五巻　新城島』書評特集〉苦難を乗り越えた先人の知恵」『琉球新報』(20140309) →2014

2014 得能壽美「〈『竹富町史　第五巻　新城島』書評特集〉文化による島興し」『八重山日報』(20140327) →2014

2014 川平成雄「〈『竹富町史　第五巻　新城島』書評特集〉『竹富町史　第五巻　新城島』が語りかけるもの」(『八重山毎日新聞』20140327) →2014

2014 「表紙の写真：上地小学校」『竹富町史だより〈第35号〉』(竹富町)

2014 通事孝作「『竹富町史』第五巻「新城島」を発刊―島の歴史・人と暮らしなどを網羅―」(『竹富町史だより〈第35号〉』竹富町)

2014 仲原靖夫「『竹富町史　第五巻　新城島』の発刊によせて」(『竹富町史だより〈第35号〉』竹富町)

2014 石川久美子「伝承が支える島の歴史―島人の情熱と誇りの集大成―」(『竹富町史だより〈第35号〉』竹富町)

2014 安里英子「蘇ったパナリ文化―『竹富町史　第五巻　新城島』の出版を祝う―」(『竹富町史だより〈第35号〉』竹富町)

2014 上江洲儀正「書評『竹富町史　第五巻　新城島』」(『竹富町史だより』〈第35号〉竹富町)

2014 赤嶺政信「書評『竹富町史　第五巻　新城島』―苦難乗り越えた先人の知恵―」(『竹富町史だより』〈第35号〉竹富町)

2014 得能壽美「文化による島興し―『竹富町史　第五巻　新城島』の編集・発刊によせて―」(『竹富町史だより〈第35号〉』竹富町)

2014 川平成雄「『竹富町史　第五巻　新城島』が語りかけるもの」(『竹富町史だより』〈第35号〉竹富町)

2014 通事孝作「《文化財探訪》26　仲盛の遠見台」(『竹富町史だより』〈第35号〉竹富町)

2015 波照間永吉「〈書評〉『竹富町史　第五巻　新城島』―哀惜と賛嘆がつまる一書―」(『竹富町史だより』〈第36号〉(竹富町)

2016 沖縄県立博物館・美術館編『鳩間島・新城島・黒島総合調査報告書』(沖縄県立博物館・美術館)

2016 仲里健「鳩間島・黒島・新城島(上地・下地)の地質」(沖縄県立博物館・美術館編『鳩間島・新城島・黒島総合調査報告書』沖縄県立博物館・美術館)

2016 山崎仁也・横田昌嗣・知念美香・仲宗根忠樹・比嘉清文・加島幹男「鳩間島・新城島(上地・下地)・黒島の植物相」沖縄県立博物館・美術館編『鳩間島・新城島・黒島総合調査報告書』(沖縄県立博物館・美術館)

2016 山崎仁也・松村雅史・吉田和久・力身恭二・目黒賢児「鳩間島・新城(上地・下地)島・黒島の動物相―昆虫を中心に―」沖縄県立博物館・美術館編『鳩間島・新城島・黒島総合調査報告書』(沖縄県立博物館・美術館)

2016 片桐千亜紀・岸本敬「鳩間島・新城島(上地)の古墓調査」沖縄県立博物館・美術館編『鳩間島・新城島・黒島総合調査報告書』(沖縄県立博物館・美術館)

2016 山崎真治「伝説の土器・パナリ焼を探る」(沖縄県立博物館・美術館編『鳩間島・新城島・黒

島総合調査報告書』沖縄県立博物館・美術館）

2016　岸本弘人・石垣忍「鳩間島・黒島・新城島における石碑・記念碑等の調査報告」（沖縄県立博物館・美術館編『鳩間島・新城島・黒島総合調査報告書』沖縄県立博物館・美術館）

2016　崎原恭子「近世琉球における烽火（火立）のネットワークについて―新城島・黒島・鳩間島を中心に―」沖縄県立博物館・美術館編『鳩間島・新城島・黒島総合調査報告書』（沖縄県立博物館・美術館）

2017　石垣繁「新城島のシヰチヰの神歌」『八重山諸島の稲作と民俗』（南山舎）

2017　仲原靖夫「パナリ―新城下地島の思い出―第１回 最初の思い出」（『月刊やいま』〈No.283〉2023まで連載）

2017　植松明石『沖縄新城島民俗誌　「パナリ」その光と影』（岩田書院）

2018　石垣佳彦「〈石垣佳彦写真館〉パナリ焼きは知っている」（『月刊やいま』〈No.283〉南山舎）

2018　飯田泰彦「島々の踊り・狂言No.３　竹富町制施行70周年記念公演　沖縄県竹富町　島々の民俗芸能―世乞い―　４　新城島節祭の巻踊り」『竹富町史だより〈第42号〉』（竹富町）

2019　石垣繁「宮古の英雄・金志川金盛は、八重山に生きる」『八重山民話の世界観―豊穣なる民話から見えてくる島の生活とその世界観を探る―』（榕樹書林）

2020　「竹富町における戦災状況　２．島々の戦災状況　（４）新城島」『竹富町史だより〈第44・45号合併号〉』（竹富町）

2020　飯田泰彦「〈島々の踊り・狂言No.５〉一番狂言（新城島）」（『竹富町史だより』〈第44・45号合併号〉（竹富町）

2020　「島々の踊り・狂言No.７〈長者の大主〉系芸能―竹富町の民俗芸能にみる―　３〈長者の大主〉系芸能のいろいろ　（２）村の役人　②村役の祝言と弥勒神による五穀の授受と子・孫の舞踊新城島の「一番狂言」（結願祭）」『竹富町史だより』〈第46号〉（竹富町）

2021　飯田泰彦「竹富町とコロナ・コレラ・アレコレ　３　年中行事にみる悪疫退散の願い　（５）新城上地島」『竹富町史だより〈第47号〉』（竹富町）→2013.11.30『竹富町史　第五巻　新城島』（竹富町）

2024　通事耕作「〈むかし八重山〉八重山で初めての海底送水施設が黒島・新城島に完成」（『月刊やいま』〈No.352〉南山舎）

2024　「那覇で「前ぬ渡節」披露―しまじま芸能祭　新城民俗芸能保存会が出演―」（20240118）

資料紹介

アジア・太平洋戦争後の竹富町に関する資料として、次の三つを紹介します。

(1) 古藤實富「惨狀の黒島を訪う」(『八重山文化』〈第21号〉八重山文芸協会)〈1948年〉
(2) 「一九六〇年会務書」(大原公民館所蔵)〈1960年〉
(3) 斜里町と姉妹町盟約に関する新聞資料〈1960年〉

(1)「惨狀の黒島を訪う」は、『八重山文化』〈第21号〉(1948年)に収録されたもので、筆者は古藤實富(1906－1961)。古藤は石垣島出身の教育者であると同時に児童文学者。アジア・太平洋戦争後は、『八重山こども新聞』の刊行、実演童話研究会、アマチュア演劇運動などで活躍しました(『沖縄大百科事典』参照)。

1948年(昭和23)ごろ、八重山地域は戦争の傷跡を引きずりながらも、ようやく復興の兆しが見えはじめていました。しかし、「近来稀なる台風」(『南西新報』1948年7月9日の見出し)の襲来が復興の前途に大きく立ちはだかりました。

「惨狀の黒島を訪う」からは、1948年に襲った台風の規模や、黒島の被害の状況、津波の実態、さらには人々の様子を具体的に知ることができます。

この台風による被害は、特に黒島において甚大で、伊古、東筋住民の多くが食糧に窮したことから、八重山民政府は被災者に対し、食糧を配給しました。八重山民政府は米軍政府の許可を得て、7月11日に黒島へトウモロコシ50袋を送出したとのことです(『南西新報』1948年7月12日参照)。同紙7月16日付には、軍政府農務課長・セルトン氏、農務技師・ベック氏が、当時の竹富町長・与那国善三氏に伴われて黒島を視察し、たいへん胸を痛めたようです。そのとき両氏は畑のサツマイモを掘り返してみたとのことですが、海水によって腐敗したサツマイモを実際手にしたとき、憐れな気持ちになったにちがいありません。

この台風のため、黒島は1948年末にいたるまで食糧難が続き、正月も迎えられないような状況でした。1948年12月22日付『南西新報』は、その様子を次のように伝えています。

> 去る台風の折、約五十町歩の海水侵入の被害を被った黒島の伊古、東筋両部落は海水が地面に浸み込んでいる為植付けが出来ず、為に最近では食糧の窮迫その極に達し、飲み水も小浜島から運ぶといった状態で、正月を前に芋どころか水にも容易にありつけぬという部落民に、民政府では此の程、救済物資として米を特配する事になっている。
>
> 尚、此の度の雨で辛うじて芋の植付けは可能になった模様である。

(2) 「一九六〇年会務書」は、『竹富町史だより』〈第52号〉紹介した、大原公民館資料の1960年（昭和35）の記録です。『大原創立五十五周年記念誌　栄光永えに』（大原創立五十五周年記念誌作成委員、2001年）をみると、当時の公民館長は波照間長氏、副館長は新善一氏でした。また本書収録の年表「大原の沿革」には、1960年度は次の記事５件が記されています。

「会務綴」（1955年度以下）
（提供　大原公民館）

1960年４月２日　太田主席西表島調査団慰問並びに調査状況視察激励のため来島
４月６日　日本政府農業資源調査団を乗せたヘリコプター不時着遭難
４月18日　弁務官資金による水道工事完了、落成式・祝賀会挙行
1961年１月８日　西表製糖株式会社工場完成、落成式挙行
２月８日　大原診療所に大石勝次医師赴任

また、1960年７月14日付『八重山毎日新聞』では、当時における西表島東部の様子が、次のように報じられています。

琉球産業㈱パイン工場の大煙突が仲間川の右岸に聳え黒い煙をむくむく吐いていた。ボイラー取り付け、ライン増設、寄宿舎の工事中だった。重油は不経済だというので島産石炭を使うことだった。300t の製糖工場が実現すれば、大富、大原は東部西表の工場地帯として琉球の経済街道を活歩する。大原は甘藷、大富の山野はパインでひしめくことだろう。この部落に潤したかねは大きいですよ。この産業でよく働く者は富み、怠け者は貧する。勝負をつけるだろう。1955年、米国が架橋してくれた仲間橋は、「陸の孤島」苦を解消して恩恵は絶大ですよ。仲間橋への賛辞は大きい。工場のおかげで郡外から帰京するのが最近増えてきたとは部落民の声である。

ちなみに民俗学者・植松明石氏が、八重山を初めて訪れたのが1960年の夏。植松氏はその後幾度となく新城島に渡って見聞を深め、「パナリ　その光と影」（二）（三）（初出は『フオクロア』〈No.２〉〈No.３〉ともに1978年発行）を執筆してますが、そのなかに「西表島大原移住記」の項目があり、1963年当時の大原地区の状況を記しています。そこから当時、日本復帰が期待され、「西表再開発のかけ声がどこへ行っても華々しく聞かれ」、活気にあふれた地域の様子がうかがえます。そして、「大原は西表島東部の行政上の中心で、竹富町役所の出張所（民家の一部屋だったが）、警察駐在所、郵便局や公民館もあり、豊かな山地の水をひく水道もあり、その上、夜十一時までは電灯が明るく灯った。雑貨を売る小店やバーもあり、上地出身者が経営する宿が一軒」あったという記録を残しています（植松明石『沖縄新城島民俗誌―「パナリ」その光と影―』岩田書院、2017年）。

「一九六〇年会務書」はそれ以前の時期に当たりますが、1963年の大原地区は、1960年に描いた希望を次々に実現させてきた時代であったようにも思われます。

(3)　「斜里町と姉妹町盟約に関する新聞資料」は、斜里町との姉妹町盟約にいたる経過を記した『北海道新聞』掲載の記事２件（1972年10月16日－10月17日）です。『竹富町史だより』〈第52号〉の特集「斜里町との交流史」でも述べたように、このような大見出しで報道されたことにより、盟約締結への勢いが増したと思われます。このほど斜里町立知床博物館よりコピーの提供がありましたので、この場を借りて紹介します。

（竹富町史編集係）

1973年１月10日、東京・日本都市センター
（提供・斜里町立知床博物館）

(1)　古藤實富「惨狀の黒島を訪う」（『八重山文化』〈第21号〉）〈1948年〉

惨狀の黒島を訪う

本誌特派員　古藤實富

客月五日、陸稻の收穫期を控えて、農民がいよへ大多忙を極めんとする矢先に、突如襲ってきた颱風は、孜々營々として築きあげた汗の結晶を、文字通り一夜の裡に遙か彼方雲煙の境へ吹きとばしてしまった。かてて加えて津波の洗禮を受けた白保、黒島等の被害は甚大なものがある。

連絡船を破損した黒島からは、くり舟をもっていち早く情報がもたらされ、聞く人々をして愕然たらしめた。三四日經って、民政府及び竹富村當局の肝入りで慰問船が出るということを、出發當日の晝發時に耳にした記者は、取るものも取り敢えず波止場へ駈けつけて、一行に加えて貰った。

午後一時半に出發して、日歸りの豫定だということだったが、出發が遲れたのと、エンジンの故障で速力が落ちた上に逆風ときているので船足が意外に遲く、黒島に着いたのが夕刻、折からの干潮時で、船を棧橋に近づけることが出來ない。船には慰問の食糧がどっさり積んである。それをおろすのに、滿潮時まで待って、棧橋へ近づけてからでなくてはならぬ。その荷揚げ完了が夜半だという見込みがついたので、一行は一泊する事になった。そこで先づ人間だけ早く上陸せねばならぬので、島の西端、保里部落の海岸へ廻り、船を陸地へ近づけて上陸した。吃水の淺い舟艇さえも近づけることの出來ぬ程の惡い船着場を、唯一の□關口として持っている黒島住民の爲に深い同情を寄せる。

一行は保里部落を一巡して被害地伊古へ向った。保里から約十二三町東の方に伊古部落がある。部落内に一歩足を踏み入れると、大傾斜した主家全壞した炊事場等の殘骸が生々しく慘禍の跡を物語り、喪心したようになった人たちが、じくへにぬれた疊や衣類を干したり、古茅の取りかたづけをしている。部落會長の家に、麥、大豆、粟等の雜穀がひろげてあるので、迂濶にもぬれたのかと聞いたら、他部落からの慰問食糧だとのこと、温い隣人愛の贈物だったのである。

全部落七尺以上も浸水した伊古の地形は海岸からだらへ坂を下った所にある。そしてごくゆるやかな上り傾斜をもった道路が、東筋部落に通じている。いえば伊古は各方面から水の流れ込む盆の底の様な地形になっている。今度の水害は、直接伊古の海岸から浸入したのではない。島の東端の岩壁

を跳び越した津波が、こゝまでなだれ込んで來て增水したのだという。

伊古一巡の後、東筋で少憩した一行は、津波襲來の現場東海岸まで視察に出かけた東筋部落を離れて東へ出れば、一面の野原は、燒跡の樣に黑茶一色、緑といえば、アダンとヤラボ林と蘇鐵位のものだ。アダン林の七八尺位の高さに塵芥が引つかゝっていて、水位の跡を示している。芋畠の側を通ると、畠主があきらめきれぬまゝに、堀り取ってみたが全然物にならぬので、そのまゝ捨ててしまったらしい芋がごろへしていて、その腐った臭がぷんへ鼻の奥をつく。激戰地の死体もかくやと偲ばるゝ程の慘情に、記者は思わず目をおうた。

そんな所を約十一二町ほど行くと東海岸に出る。海岸近くの畠は表土がおし流されて、下の岩盤が肌を現し、或は海岸から吹き上げられた白砂が畠を埋め、奔流の通った跡が歷然として殘っている。

ほんの海岸端にある喜屋武御嶽の御堂はこっぱみじんに打ちのめされて跡かたもなく、瓦のかけらが少し散らかっているのもいたましい。附近には根こそぎにされた大木がひっくりかえされて、鳥居が淋しく殘っていた。行方不明になった神体は、村中總がかりで探し廻ったが皆目分らぬとのこと。

海岸に出る。

あれだけの猛威をふるった海面は、何事もなかった樣な柔和な表情をたたえて、ざぶりざぶりなぎさに打ち寄せている。

沖のリーフからもぎ取って運んで來たらしい珊瑚礁の大岩が、生々しい傷あとも痛ましく海岸にころがり、もとから海岸に坐っていた大岩は、怒濤にさんへゆり動かさられたらしく、下敷の岩盤が碎かれて白い肌を見せている。

自然の防波堤を形造っている海岸の岸壁も、大自然の暴君の前には一文の價値もなかったのか、大龜裂を長くひいて打ち折られ、下に落ちてへたばっている。

折り重って崩れ落ちている岩を傳って、岩壁の上に登っていた先行の人たちが、何を見つけたのか、「ワアーッ!!」という驚嘆の聲をはり上げた。副知事の大濱さんが、「おい古藤君!!あれを見てごらん、君にやるから持って歸らんか」とおっしやる。何物が鎭座ましますかと思いながら追いついて見ると、驚いた。ほんとに驚いた。厚さ五尺縱二間、横一間、重さにして十噸もあろうかと思われるほどの大岩が、今よじ登って來た岩壁から、四五十間ほども離れた陸上に投げとばされてころがっている。勿論あの岩壁からたゝき折られたものだ。一同茫然自失、只々大自然の猛威に驚異の眼を見張り、戰慄を覺えるのみであった。

この岩壁を跳び越えた津波は、陸地の方が低くなっている爲に、海岸に逆流が出來ず、障碍物をおし流しながら、低地へへと大奔流を續け、終には島の約四分の一即ち、北野原・中野原・南風原・崎原・サー原・南風保多原の全耕作地と、伊古部落全部に東筋部落の一部を海水の底に沈めたのである。

伊古の住民の語るところによれば、當日荒れ狂う颱風と、おそろしい海鳴の音におののきながら、戸を密閉して風のおさまるのを待っていたが、夕方になって急に部屋の疊が浮いたので、びっくりして外をながめると、外は一面に海と化しているのに二度びっくり、着のみ着のまゝで外へとび出した。忽ち全部落阿鼻叫喚の巷と化し、一時はどうなるかと心配したが、やっとのことで、海岸に一番近くて比較的高い所にある伊古家と、學校へ全員無事避難完了したのが夜半になっていた。夜に入って急に高さを增すした水量は全部落の石垣を沒し、東筋から泳いで來た救助隊の者も、水中の石垣を手さぐりで探しあてて道路を知ったということである。

この度の避難行動や救助作業が極めて敏速に行われたために、人命に別條がなかったという事は不幸中の幸だが、その裏に、全力を盡して奮闘した人たちのある事を忘れてはならぬ。島の駐在亀井巡査が家族や寢を忘れて、救助作業の指導に當ったその犠牲的行動には、いたく島民を感激させ「警察官の有難さが初めて分った」と口をそろえて感謝している。

黒島の低地帯は珍しい所で、夏季など子供達が泳げる程も海水が湧き出す奇妙な場所もあるという。今度海水の侵入した所は、例年暴風期になると多少の侵入はあるが、今度の様な椿事は明和海嘯以來の事だろうと島の人達は話している。

之は黒島ばかりの問題ではないが、暴風による海砂の吹き上げが、農耕地に相當な被害を及ぼしている現状からおして、かい岸保安林に對する認識を深めるということゝ、擧島一致その育成に當るべきであるということは、決してゆるがせにならぬ問題である。

伊古、東すじの住民は全食糧を失ってしまった。かい水につかった約七十町歩の耕作地は、約二ヶ月間の作物作植付不能と見られ、特に、南風原・喜屋武御嶽附近の畠は表土流失やらかい砂吹上げ等により約二町歩は全然耕作不能地と化し去つた。この耕作地は、主に東すぢ部落住民の穀倉であり、又家畜飼料の生産地でもあったのである。この度の災害によりその全部を失って人畜共に飢餓戦上に追いつめられているのだ。その苦惱察するに餘りある。失った食糧と家畜は約百七十万円と見積られている

之等罹災民に要望したいのは、人力で如何ともする事の出來ぬ大自然の試錬に耐えて、決して精神の動搖を起すことなく、復興に増産に死力を盡されん事である。(終)

⑵　「一九六〇年会務書」(大原公民館所蔵)〈1960年〉

一九六〇年会務書

四月　行事　項目

四月一〇日　会ム引継す

一〇日　新幹部初顔合せ会

十一日　保健所ヨリ家(ママ)ソ薬ロフロリン配布

十二日　六〇年度予算書作成を行ふ

一四日　一五日の総会為め幹部会開催

一五日　一九六〇年度度始め総会実施す　予算書事業案承認

十六日　製糖工場設立のため琉球産業会社と懇談

十七日　ローレ弁ム官代理離任挨拶のため来島

十八日　頌徳碑の清掃作業

十八日　籾買上のため農協の金城氏来島で懇談

十八日　石中旅行隊来島で出迎へをなす

十九日　大原部落春季清潔検査実施

三〇日　ＰＴＡ評議員会で出席

〃日　学校長外五名の歓迎会で

五月二一日　大浜中学校旅行隊来島で出迎へ
　二二日　教育事ム所ヨリ社会指導主事来島で幹部懇談会
　二三日　東部地区青年競技大会開施
　二四日　連合会開催
　二五　ローレ弁ム官代理感謝状贈呈のため区長会長出張す
　二六日　竹富町役所ヨリ「タカシヲノオソレアリ」各部落へ知らせてナ
五月二七日　我那覇、谷口両先の送別で出席
六月一日　保育所入所式で出席
　一日　福祉事ム所ヨリ久高氏外一名来島で懇談
　六日　経済局農ム課ヨリ島袋氏外三名農村映画会後懇談
　三日　白保中学校旅行隊来島で出迎
六月九日　各種陳情内申のため会長会計出張を為す（地方庁にあへないので帰島）
　一四日　キリスト教普及のため公民館にて原燈映写
　一五日　地方庁経済課より甘蔗植付面積調査のため来島で懇談
　一七日　各種陳情内申のため市又出直し
　一八日　町長以下五名懇談をなす
　一九日　石垣市依り帰島
　一九日　教育税完納運動で教育委員大久氏外一名来島で幹部会を実施す
　二五日　豊年祭の件臨時総会人員不足為留金
六月二八日　西表調査団ターナー氏外一名来島で出迎
　二七日　豊年祭の件で再開す
七月六日　会長ブース弁ム官観（ママ）迎の為め出張
七月八日　アメリカ西表調査団出迎へため会長宅にて幹部会をなす
　九日　豊年祭打合せため幹部親和会の方と打合せ
　九日　アメリカ調査団出迎へのため準備並びに出迎へ
　一〇日　調査団選発隊来島
　十一日　調査団二十数名来島
　十一日　豊年際（ママ）舞踊指導ため小波本氏来島で懇談
　十三日　二期予算徴収割当で幹部会をなす
　十三日　水道水源地取指導で旧会長と一緒に行
　十三日　午后六時半ヨリアメリカ調査団と懇談をなす
七月一四日　豊年祭予算徴収並びに二期分の会費徴収
　一四日　副首席外八名調査団慰問のため来島で出迎后後八時ヨリ懇談会実施
　一五日　大原豊年際実施
　一五日　アメリカ調査団の慰問実施
　十六日　加勢本氏　細原氏の観（ママ）送会
　一七日　福祉物資の配布
　一七日　アメリカ調査団のパーテイに出席

一七日　中央教育委員長来島観(ママ)迎会に出席
一八日　アメリカ調査団引揚で見送をなす
二六日　鳩間八重子安谷屋先生の観(ママ)迎会で出席
二八日　新旧区長観(ママ)送会実施
八月二日　町青年競技会で祝電を送る
四日　黒島ヨ助氏沖縄引揚す
八月二十六日　沖縄南部市長村長来島で出迎へをなす
八月二七日　ゼイコブス弁ム官代理並びに具志川村議員来島で出迎へ
二八日　沖縄教職員青年部並びに教職員事ム局長来島で出迎へ
二八日　后後八時半ヨリ事ム局長の講演会実施
二九　地方庁経済課普及主事並びに町普及員来島で懇談
九月二日　町民有地拂下陳情の件で区長外一名
九月十口日　農道補修作業実施
九月一〇日　葬儀具別途予算証認ため臨時総会実施
九月八日　竹富町長民情視察ため来島で観(ママ)迎会実施
九月十二日　葬儀具資材講入のため会長出市
九月一四日　葬儀具手始め　節際(ママ)を挙行す
一九日　葬儀具の用件で臨時総会実施
二〇日　葬儀具終了で引續き部落懇談会
一〇月二日　敬老会準備のため会計出市
三日　八重山群島４Ｈクラブ研修会来島す
四日　４Ｈクラブ指導研修会の祭講師と懇談実施
五日　大原部落敬老会実施す
六日　連合会開催
九日　大原小学校校舎記念事業の件でＰＴＡ評議員会開催
十日　大原部落内排水の草刈作業実施
十一日　大原部落秋季清潔検査実施
十三日　結願祭予算徴収部落三期予算徴収
十四日　大原部落結願祭実施
十四日　東京大学生岡崎一雄外三名来島す
十六日　大原小中学校運動会実施
二六日　甘蔗夜当虫発で地方庁並び町役所に電報陳情す
二八日　町役所ヨリ東盛氏甘蔗病害虫調査のため来島懇談
二九日　町有地拂下認可になったので代金捻出のため臨時総会留金
二九日　福祉事ム所ヨリ古見氏来島で懇談
三〇日　朝起で二九日引續総会で証認を受ける
三一日　町有地代金支拂のため会計出市
十一月九日　スペリクロン反能注実施部落民

十一月二十三日　中間苗圃原苗圃調査のため西垣氏来島
　　二十四日　具志村ヨリ議員団来島で出迎
　　二十七日　大小学校永久校舎落成祝賀会のため評議員会開催
　　二十八日　松山勇氏細原氏の送別会
　　二十八日　日本・本土ヨリの医師配置問題で総会実施
十二月四日　　大原小学校校舎落成祝賀会実施　教育長より納税について表賞状を受與される
十二月五日　　肥料会社ヨリ映写会引續き農協中田氏外二名と懇談
十二月一九日　民政府ヨリ桑江氏来島懇談
　　二一日　野ソ駆除のため地方庁ヨリ大浜氏町役所ヨリ東盛氏来島懇談
一月五日　　消防団新年宴会で会長会計出席
　八日　　西表製糖工場落成式を挙行される
一月一四日　註在西盛氏営林署高江洲氏公看大浜常子の観(ママ)迎会
一月一五日　先島議長団来島
一月一五日　成人祝実施
　二六日　沖縄テレビーヨリ二人来島開発問題で幹部懇談会
　二九日　警察署長来島幹部懇会
二月一日　　医師出迎へため会長大舛氏二名出張
　二日　　医師住宅清掃で善一靖外二名日中
二月九日　　日本ヨリの医師観(ママ)迎のため連合会開催
二月十一日　医師来島で部落民総出で出迎引續き観(ママ)迎会
二月一四　　臨時総会西表製糖会社水道引込の件（留金）
　二三日　地方庁長仲本氏へ祝電
　二四日　立法院来島されるとの事で連合会開催
二月二五日　立法院来島で各種陳情準備中天候悪のため中止
　二三日　后後八時ヨリ西表製工場水道引込で臨時総会再開
　二八日　営林所(ママ)金城氏官有地問題で部落幹部と懇談
三月二日　　郵便局大江氏と懇談
　六日　　大原小中学校学芸会開催
　九日　　保健所ヨリマラリア発生で本盛氏来島で懇談
　十三日　大原保育所の学芸会開催す（同日ハタブシヨウ（照屋林助来島）
三月一四日　福祉所長来島で懇談幹部
　十六日　開拓の片桐氏ヤツサ道路則(ママ)量で来島で懇談
　十三日　一ツ橋大学より西表調査の為来島（三人）
　十四日　后午八時ヨリ部落幹部と懇談す
　〃　〃　東大、早田(ママ)大学ヨリ視察為来島（三人）
　十九日　琉大京大合同調査の為西部ヨ横断　来島（四人）
　二二日　八重山保健所並町役所ヨリ係官臨時清潔検査の為来島す
　二三日　朝起作業実施　部落排水の草刈す

二四日　朝作業前日同し　午前九時ヨリ保健所職員並に部落幹部検査実施す
二五日　大原保育所修業式並に卒業式挙行す
二七日　朝起作業にて三部落合同にて飛行場整備す
二八日　朝起にて豊原大原中の植樹作業実施す

③　斜里町と姉妹町盟約に関する新聞資料〈1972年〉

①1972年（昭和47）10月16日

日本列島駆ける“姉妹の縁”
斜里（知床国立公園）と竹富（沖縄・西表国立公園）来月両町長が期待の“詰め”

【斜里】日本最北端の国立公園、知床で有名な網走管内斜里町と、南の果て西表国立公園をかかえる沖縄県竹富町との姉妹都市縁組みの話が進められている。十一月には東京で両町長が具体的に話し合う予定で、国立公園が取り持つこの縁組み成立を町民は、期待の目で見守っている。

斜里町は北緯四四度、東経一四五度付近に位置し、オホーツク海に面する弓状に広がった町。人口一万六千人。ジャガイモ、ビートなどの畑作のほか漁業も盛んだ。昨春以来の知床ブームで一躍有名となり、最近では自然保護に力を入れている。

一方の竹富町は、沖縄本島から約四百五十キロ離れた八重山諸島にある人口四千五百人の町で、沖縄県では二番目に大きい西表（いりおもて）島のほか小さな島々からなっている。中心になる西表島は山岳が起伏して平地は少なく、この山岳に源を発する河川の流域は原始林におおわれ、下流はマングローブ地帯。ほかの小さな島々は、ほとんどが隆起珊瑚礁からなり、南国の新しい観光地として注目されている。

この両町の縁組みの話が出たのは九月初旬、藤谷豊斜里町長が、現在西表国立公園事務所に籍を置く元阿寒と知床国立公園のレンジャー、沢田栄介さん（四五）に手紙を送ったのがきっかけ。竹富町側からも好意的な返事が寄せられており、斜里町ではすでに町勢要覧などの資料を送りＰＲに懸命だ。十一月九日、東京で開かれる全国町村長会議には、藤谷町長と瀬戸弘竹富町長も上京し、本格的に話し合うことにしている。

斜里町の町章はオジロワシ、竹富町は白頭ワシ―頭と尾の白いワシが両町の町章とあって、この縁組みに積極的な斜里町ではすでに盟約書の検討を進めている。姉妹都市の契りが結ばれた場合は、観光地をかかえて自然保護の問題で意見交換したり、観光宣伝もお互いに協力してやりたいと、意欲的。このほか小中学生の絵画などの交換、児童生徒の交流もしたいという。藤谷町長も『沖縄の小、中学生を流氷の時期に呼びたい。ビックリするよ』と、東京での対面を待ち望んでいる。

②1972年（昭和47）10月17日

使用許可まだの知床新道路　バス走らせ探勝会

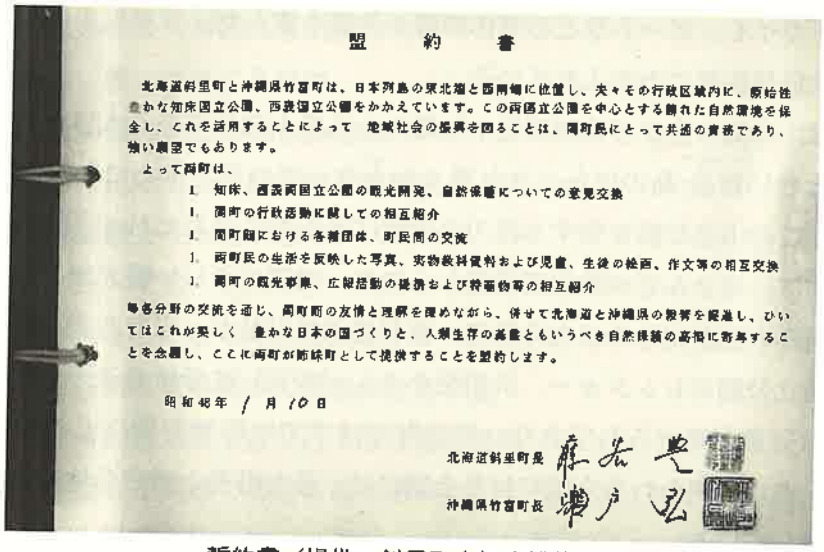
【斜里】秘境観光のホープとして、地元の期待を集めている“知床横断道路”のうち、今年、完工した網走管内斜里町側の区間でこのほど、網走開建がまだ“使用許可”を出していないのに、地元の

観光協会が先走って観光バスを通していたことがわかった。同開建は『まだ、安全施設も整備していないので、事故でも起きたら大変―』と、せっかちな“観光路線”にオキュウをすえた。

“知床横断道路”は知床連峰を越えて、斜里町と根室管内羅臼町を結ぶ約二十五キロのルート。三十八年に網走、釧路両開建が双方から同時に着工したが、今年九月で、網走開建が受け持つ斜里町ウトロ―知床峠間約十一キロが工事を終えた。一応、車が通れる状態にはなったものの、羅臼側の完工は四、五年先の見通しだし、完成した区間も、ガードレールなどの安全施設を整備しなければ通行は危険なため、一般の道路使用は許可していない。

しかし、完成した区間の“終点”にあたる知床峠は、羅臼岳のすぐ下にあって標高七百四十メートル。国後島を望むことができる景勝の地とあって、地元では『全線開通前に斜里町側だけでも、使わせてもらいたい』（早坂斜里町産業部長）という要望が強い。こうしたあせりもあってか、同町観光協会（吉野健夫会長）は八日と十五日の両日、地元の観光バスを利用して実施した“知床秋の探勝会”のルートにこの路線を組み入れ、バスを走らせた。この知らせを聞いた同管内のほかのバス会社やマイカーも“事情”を知らずに同峠に繰り出したという。

これに対し、同開建は十六日、客寄せをねらう地元観光協会の“勇み足”と判断し『山中の道路だし、安全施設も整備しないうちにバスを入れられては困る』と、先走る“観光商魂”にクギをさした。



盟　約　書

北海道斜里町と沖縄県竹富町は、日本列島の東北端と西南端に位置し、夫々その行政区域内に、原始性豊かな知床国立公園、西表国立公園をかかえています。この両国立公園を中心とする優れた自然環境を保全し、これを活用することによって　地域社会の振興を図ることは、両町民にとって共通の責務であり、強い願望でもあります。

よって両町は、

1. 知床、西表両国立公園の観光開発、自然保護についての意見交換
1. 両町の行政活動に関しての相互紹介
1. 両町間における各種団体、町民間の交流
1. 両町民の生活を反映した写真、実物教材資料および児童、生徒の絵画、作文等の相互交換
1. 両町の観光事業、広報活動の提携および特産物等の相互紹介

等各分野の交流を通じ、両町間の友情と理解を深めながら、併せて北海道と沖縄県の親睦を促進し、ひいてはこれが美しく　豊かな日本の国づくりと、人類生存の基盤ともいうべき自然保護の高揚に寄与することを念願し、ここに両町が姉妹町として提携することを盟約します。

昭和48年 1月10日

北海道斜里町長　藤若典

沖縄県竹富町長　瀬戸弘

誓約書（提供・斜里町立知床博物館）

書評　『竹富町史だより』〈第52号〉を読んで

斜里町立知床博物館学芸係
三　枝　大　悟

『八重山毎日新聞』読者の方々にとって、私が住む「斜里町」はお馴染みの地名だろうか。そんな懐疑を抱くのは、「『〇〇町』と言われても、どこかわからないし、都道府県名から教えてほしい」といつも思っているからだ。

素っ頓狂な疑問から始めてしまったが、さておき本書を紹介したい。『竹富町史だより』は竹富町の歴史や文化をまとめる『竹富町史』編集事業のニュースレターで、本書は年２回刊行される内の１冊である。編集事業は1988年の開始以来、21冊もの『町史』を世に送り出してきた。現在は一つ一つの島を深掘りし、700ページを超える情報を詰め込んだ「島じま編」シリーズを刊行中だ。成果発表の早さと内容・分量の厚さは、地域史づくりが盛んな沖縄県内でも屈指の位置にある。

普段は地元ネタ満載の『竹富町史だより』だが、最新〈第52号〉の表紙、写真にあるのが冒頭で触れた北海道「斜里町」の名だ。「祝姉妹町斜里町－竹富町」と書かれた看板の前で、瀬戸弘竹富町長と、藤谷豊斜里町長（いずれも撮影当時）が握手を交わしている。両町が日本の両端で国立公園を有することを縁に姉妹町となって半世紀を迎えたことを記念し、本号は「〈特集〉斜里町との交流史」と銘打ち、前半が特集、後半が地元に関する論考の二部構成になっている。

特集では、姉妹町盟約の締結に至った経緯や、漁業交流の顛末が語られる。これらは私が勤める斜里町立知床博物館が2014年に刊行した『自然と歴史が結んだ絆』が取り上げたことがあるが、本書は瀬戸元町長の著書や地元紙などの資料をもとに、新たな視点が盛り込まれている。

例えば、斜里の定置網漁法を竹富で行う取り組みについて、当時の『八重山毎日新聞』は漁法導入に係る経費を算出し「大きな悩みの種」と冷静に述べている。両町交流の歓迎ムードが当たり前となった今としてはヒヤリとする指摘だ。

一方、職員交流第１号として１カ月を斜里で過ごした宜間正八氏の復命書は楽しい。公文書がそのまま転載されている意外性もさることながら、斜里到着のその足でキャンプ形式のイベントに送り込まれ、冷夏に震え、河川氾濫の対応に追われる怒涛の日々が、多くの写真と読ませる文章でリアルに伝わってくる。現役町職員の私の目にも大変そうに見えるが、どれも「貴重な体験」と言ってのけるところが、斜里での同僚職員から今も「宜間ちゃん」と親しみを込めて呼ばれている所以だと実感した。

後半では、地域の方々からの聞き取りや、公民館で保管されていた記録、現地調査などから得られた、竹富研究の最前線を味わえる。特に西表島の「波上炭鉱跡」の調査レポートは、メンバー間の自由なやりとりや、特徴あふれるぼやきを交えながら、藪を切り開き突き進む冒険譚だ。地域調査は地味で根気が必要な作業だが、綿密な準備の先でこんなワクワクを感じる瞬間が確かにある。同業者には共感を、他の読者には驚きを与えてくれる。

さて、知床博物館には「姉妹町友好都市交流記念館」が併設されている。斜里の学芸員が竹富で収集した様々な資料や、地元の職人さんの手による１／１スケールの赤瓦民家を展示し、開館以来30年に渡って竹富ファンを育て続けてきた。その設置目的は「姉妹町・友好都市の姿を理解し、お互いの交流の契機とするとともに、姉妹町・友好都市について一層知ることにより、改めて私たちの住む『斜里・知床』をも理解する学習の場」とすることだと謳われる。

本書も同様に、竹富と斜里との交流を特集しつつ、その中心は地元の資料と人に置かれている。3,000キロ離れた地を題材に地元を知るという不思議で面白い感覚をぜひ味わってほしい。そして、冒頭の問いに「？」が浮かんだ方は、これを機会にぜひ斜里町を知り、足を運んでいただきたい。

（『八重山毎日新聞』2023年10月16日掲載）

姉妹町斜里町からの寄贈図書一覧表

(1) 特別展

書名（発行所、発行年）	編著者・編集	寄贈者
『オクシベツ川流域の先史文化』 （斜里町立知床博物館、1980年）	斜里町立知床博物館	斜里町教育委員会、 斜里町立知床博物館
『斜里―下町の歴史散歩―』 （斜里町立知床博物館、1981年）	斜里町立知床博物館	斜里町教育委員会、 斜里町立知床博物館
『知床のヒグマ』 （斜里町立知床博物館、1982年）	斜里町立知床博物館	斜里町立知床博物館 斜里町教育委員会、
『知床に輝く星たち』 （斜里町立知床博物館、1983年）	斜里町立知床博物館	斜里町教育委員会、 斜里町立知床博物館
『よみがえる古代文化』 （斜里町立知床博物館、1984年）	斜里町立知床博物館	斜里町教育委員会、 斜里町立知床博物館
『知床の鳥』 （斜里町立知床博物館、1985年）	斜里町立知床博物館	斜里町教育委員会、 斜里町立知床博物館
『斜里平野のおいたち』 （斜里町立知床博物館、1986年）	斜里町立知床博物館	斜里町教育委員会、 斜里町立知床博物館
『消えた北方民族―オホーツク文化の終えん―』 （斜里町立知床博物館、1987年）	斜里町立知床博物館	斜里町教育委員会、 斜里町立知床博物館
『斜里町産業発達史』 （斜里町立知床博物館、1988年）	斜里町立知床博物館	斜里町教育委員会、 斜里町立知床博物館
『流氷　そのなぞと人々の生活』 （斜里町立知床博物館、1989年）	斜里町立知床博物館	斜里町教育委員会、 斜里町立知床博物館
『宝石と鉱石が語る』 （斜里町立知床博物館、1990年）	斜里町立知床博物館	斜里町教育委員会、 斜里町立知床博物館
『近世の斜里』 （斜里町立知床博物館、1991年）	斜里町立知床博物館	斜里町教育委員会、 斜里町立知床博物館
『斜里町の教育100年』 （斜里町立知床博物館、1992年）	斜里町立知床博物館	斜里町教育委員会、 斜里町立知床博物館
『峰浜のむかし』 （斜里町立知床博物館、1993年）	斜里町立知床博物館	斜里町教育委員会、 斜里町立知床博物館
『北海道と知床の化石』 （斜里町立知床博物館、1994年）	斜里町立知床博物館	斜里町教育委員会、 斜里町立知床博物館
『知床の蝶と蛾』 （斜里町立知床博物館、1995年）	斜里町立知床博物館	斜里町教育委員会、 斜里町立知床博物館
『鹿　DEER』 （斜里町立知床博物館、1996年）	斜里町立知床博物館	斜里町教育委員会、 斜里町立知床博物館

『知床の温泉』 （斜里町立知床博物館、1997年）	斜里町立知床博物館	斜里町教育委員会、 斜里町立知床博物館
『知床の海獣狩猟』 （斜里町立知床博物館、1998年）	斜里町立知床博物館	斜里町教育委員会、 斜里町立知床博物館
『斜里町の縄文時代 - 衣食住とお墓』 （斜里町立知床博物館、2000年）	斜里町立知床博物館	斜里町教育委員会、 斜里町立知床博物館
『知床の漁業』 （斜里町立知床博物館、2001年）	斜里町立知床博物館	斜里町教育委員会、 斜里町立知床博物館
『知床の樹木』 （斜里町立知床博物館、2002年）	斜里町立知床博物館	斜里町教育委員会、 斜里町立知床博物館
『骨の図鑑／骨格から見た知床の哺乳類』 （斜里町立知床博物館、2003年）	斜里町立知床博物館	斜里町教育委員会、 斜里町立知床博物館
『活火山　羅臼岳』 （斜里町立知床博物館、2004年）	斜里町立知床博物館	斜里町教育委員会、 斜里町立知床博物館
『世界遺産知床』 （斜里町立知床博物館、2005年）	斜里町立知床博物館	斜里町教育委員会、 斜里町立知床博物館
『来運１遺跡』 （斜里町立知床博物館、2006年）	斜里町立知床博物館	斜里町教育委員会、 斜里町立知床博物館
『知床のシダ』 （斜里町立知床博物館、2007年）	斜里町立知床博物館	斜里町教育委員会、 斜里町立知床博物館
『知床の動物たちにひそむ危険と対処』 （斜里町立知床博物館、2008年）	斜里町立知床博物館	斜里町教育委員会、 斜里町立知床博物館
『斜里川の自然』 （斜里町立知床博物館、2009年）	斜里町立知床博物館	斜里町教育委員会、 斜里町立知床博物館
『こんなに多様な知床の鳥たち』 （斜里町立知床博物館、2010年）	斜里町立知床博物館	斜里町教育委員会、 斜里町立知床博物館
『発掘されたウトロ遺跡群』 （斜里町立知床博物館、2011年）	斜里町立知床博物館	斜里町教育委員会、 斜里町立知床博物館
『オホーツク海岸の石』 （斜里町立知床博物館、2012年）	斜里町立知床博物館	斜里町教育委員会、 斜里町立知床博物館
『津軽藩士殉難事件とその時代』 （斜里町立知床博物館、2013年）	斜里町立知床博物館	斜里町教育委員会、 斜里町立知床博物館
『世界遺産10周年／知床ー西表からのメッセージ』 （斜里町立知床博物館、2014年）	斜里町立知床博物館	斜里町教育委員会、 斜里町立知床博物館
『世界遺産の核心　知床岬』 （斜里町立知床博物館、2015年）	斜里町立知床博物館	斜里町教育委員会、 斜里町立知床博物館
『ヒグマ、その現在・過去・未来』 （斜里町立知床博物館、2016年）	斜里町立知床博物館	斜里町教育委員会、 斜里町立知床博物館

『知床の森の秘密／人とクロテンとシデムシ』 （斜里町立知床博物館、2017年）	斜里町立知床博物館	斜里町教育委員会、 斜里町立知床博物館
『丘に眠るオホーツク文化』 （斜里町立知床博物館、2018年）	斜里町立知床博物館	斜里町教育委員会、 斜里町立知床博物館
『鮭と川と人と／サケの長い旅』 （斜里町立知床博物館、2020年）	斜里町立知床博物館	斜里町教育委員会、 斜里町立知床博物館
『斜里平野の魅力』 （斜里町立知床博物館、2023年）	斜里町立知床博物館	斜里町教育委員会、 斜里町立知床博物館

② 郷土学習シリーズ・他

書名（発行所、発行年）	編著者・編集	寄　贈　者
『知床の蝶』 （斜里町立知床博物館、1979年）	斜里町立知床博物館	斜里町教育委員会、 斜里町立知床博物館
『斜里海岸の植物』 （斜里町立知床博物館、1980年）	斜里町立知床博物館	斜里町教育委員会、 斜里町立知床博物館
『知床の野鳥観察』 （斜里町立知床博物館、1981年）	斜里町立知床博物館	斜里町教育委員会、 斜里町立知床博物館
『知床の高山植物』 （斜里町立知床博物館、1982年）	斜里町立知床博物館	斜里町教育委員会、 斜里町立知床博物館
『シマリスの四季』 （斜里町立知床博物館、1983年）	斜里町立知床博物館	斜里町教育委員会、 斜里町立知床博物館
『知床半島西岸の地名と伝説』 （斜里町立知床博物館、1984年）	斜里町立知床博物館	斜里町教育委員会、 斜里町立知床博物館
『知床の気象』 （斜里町立知床博物館、1985年）	斜里町立知床博物館	斜里町教育委員会、 斜里町立知床博物館
『地名探訪しゃり』 （斜里町立知床博物館、1986年）	斜里町立知床博物館	斜里町教育委員会、 斜里町立知床博物館
『草と木樹』 （斜里町立知床博物館、1987年）	斜里町立知床博物館	斜里町教育委員会、 斜里町立知床博物館
『知床の哺乳類』 （斜里町立知床博物館、1988年）	斜里町立知床博物館	斜里町教育委員会、 斜里町立知床博物館
『知床半島の生い立ち』 （斜里町立知床博物館、1989年）	斜里町立知床博物館	斜里町教育委員会、 斜里町立知床博物館
『オジロワシとオオワシ』 （斜里町立知床博物館、1990年）	斜里町立知床博物館	斜里町教育委員会、 斜里町立知床博物館
『知床海岸の花101』 （斜里町立知床博物館、1991年）	斜里町立知床博物館	斜里町教育委員会、 斜里町立知床博物館

『ウトロの自然と歴史』 (斜里町立知床博物館、1992年)	斜里町立知床博物館	斜里町教育委員会、 斜里町立知床博物館
『斜里岳の自然 - 生いたちと高山植物』 (斜里町立知床博物館、1993年)	斜里町立知床博物館	斜里町教育委員会、 斜里町立知床博物館
『磯の生物　チャシコツ崎の自然観察』 (斜里町立知床博物館、1994年)	斜里町立知床博物館	斜里町教育委員会、 斜里町立知床博物館
『知床の人と自然／国立公園30周年』 (斜里町立知床博物館、1995年)	斜里町立知床博物館	斜里町教育委員会、 斜里町立知床博物館
『オホーツク知床のさかな』 (斜里町立知床博物館、1996年)	斜里町立知床博物館	斜里町教育委員会、 斜里町立知床博物館
『斜里海岸砂丘の自然―野外博物館へようこそ―』 (斜里町立知床博物館、1997年)	斜里町立知床博物館	斜里町教育委員会、 斜里町立知床博物館
『斜里・知床の近代化遺産』 (斜里町立知床博物館、1998年)	斜里町立知床博物館	斜里町教育委員会、 斜里町立知床博物館
『知床データブック2005』 (斜里町立知床博物館、2005年)	斜里町立知床博物館	斜里町教育委員会、 斜里町立知床博物館
『知床データブック2010』 (斜里町立知床博物館、2010年)	斜里町立知床博物館	斜里町教育委員会、 斜里町立知床博物館
『知床の高山植物／改版』 (斜里町立知床博物館、2013年)	斜里町立知床博物館	斜里町教育委員会、 斜里町立知床博物館
『世界遺産10周年「知床」４版編集』 (斜里町立知床博物館、2014年)	斜里町立知床博物館	斜里町教育委員会、 斜里町立知床博物館
『北海道の哺乳類』 (斜里町立知床博物館、2017年)	斜里町立知床博物館	斜里町教育委員会、 斜里町立知床博物館

⑶　ライブラリー・他

書名（発行所、発行年）	編著者・編集	寄　贈　者
『斜里町郷土研究11号』 (斜里町立知床博物館、1988年)	斜里町立知床博物館	斜里町教育委員会、 斜里町立知床博物館
『松浦武四郎知床紀行集／解説：秋葉実』 (斜里町立知床博物館、1994年)	斜里町立知床博物館	斜里町教育委員会、 斜里町立知床博物館
『企画展／斜里 - わが町の戦後50年　斜里町郷土研究12号』 (斜里町立知床博物館、1995年)	斜里町立知床博物館	斜里町教育委員会、 斜里町立知床博物館
『開館20周年フォーラム「斜里歴史再考」報告集』 (斜里町立知床博物館、1998年)	斜里町立知床博物館	斜里町教育委員会、 斜里町立知床博物館
『知床ライブラリー１／知床の鳥類』 (斜里町立知床博物館、1999年)	斜里町立知床博物館	斜里町教育委員会、 斜里町立知床博物館

『知床ライブラリー２／知床のほ乳類Ⅰ』 （斜里町立知床博物館、2000年）	斜里町立知床博物館	斜里町教育委員会、 斜里町立知床博物館
『知床ライブラリー３／知床のほ乳類Ⅱ』 （斜里町立知床博物館、2001年）	斜里町立知床博物館	斜里町教育委員会、 斜里町立知床博物館
『知床ライブラリー４／知床の魚類』 （斜里町立知床博物館、2003年）	斜里町立知床博物館	斜里町教育委員会、 斜里町立知床博物館
『知床ライブラリー５／知床の昆虫』 （斜里町立知床博物館、2003年）	斜里町立知床博物館	斜里町教育委員会、 斜里町立知床博物館
『知床ライブラリー６／知床の植物Ⅰ』 （斜里町立知床博物館、2005年）	斜里町立知床博物館	斜里町教育委員会、 斜里町立知床博物館
『知床ライブラリー７／知床の植物Ⅱ』 （斜里町立知床博物館、2006年）	斜里町立知床博物館	斜里町教育委員会、 斜里町立知床博物館
『知床ライブラリー８／知床の地質』 （斜里町立知床博物館、2007年）	斜里町立知床博物館	斜里町教育委員会、 斜里町立知床博物館
『知床ライブラリー９／知床の考古』 （斜里町立知床博物館、2008年）	斜里町立知床博物館	斜里町教育委員会、 斜里町立知床博物館
『知床ライブラリー10／知床の自然保護』 （斜里町立知床博物館、2009年）	斜里町立知床博物館	斜里町教育委員会、 斜里町立知床博物館
『自然と歴史が結んだ絆／竹富弘前盟約記念』 （斜里町立知床博物館、2013年）	斜里町立知床博物館	斜里町教育委員会、 斜里町立知床博物館
『斜里町郷土研究13号』 （斜里町立知床博物館、2021年）	斜里町立知床博物館	斜里町教育委員会、 斜里町立知床博物館

(4) 知床博物館研究報告

書名（発行所、発行年）	編著者・編集	寄　贈　者
『第１集』（斜里町立知床博物館、1978年）	斜里町立知床博物館	斜里町教育委員会、 斜里町立知床博物館
『第２集』（斜里町立知床博物館、1979年）	斜里町立知床博物館	斜里町教育委員会、 斜里町立知床博物館
『第３集』（斜里町立知床博物館、1980年）	斜里町立知床博物館	斜里町教育委員会、 斜里町立知床博物館
『第４集』（斜里町立知床博物館、1981年）	斜里町立知床博物館	斜里町教育委員会、 斜里町立知床博物館
『第５集』（斜里町立知床博物館、1982年）	斜里町立知床博物館	斜里町教育委員会、 斜里町立知床博物館
『第６集』（斜里町立知床博物館、1983年）	斜里町立知床博物館	斜里町教育委員会、 斜里町立知床博物館

『第７集』（斜里町立知床博物館、1984年）	斜里町立知床博物館	斜里町教育委員会、斜里町立知床博物館
『第８集』（斜里町立知床博物館、1985年）	斜里町立知床博物館	斜里町教育委員会、斜里町立知床博物館
『第９集』（斜里町立知床博物館、1986年）	斜里町立知床博物館	斜里町教育委員会、斜里町立知床博物館
『第10集』（斜里町立知床博物館、1987年）	斜里町立知床博物館	斜里町教育委員会、斜里町立知床博物館
『第11集』（斜里町立知床博物館、1988年）	斜里町立知床博物館	斜里町教育委員会、斜里町立知床博物館
『第12集』（斜里町立知床博物館、1989年）	斜里町立知床博物館	斜里町教育委員会、斜里町立知床博物館
『第13集』斜里町立知床博物館、1990年	斜里町立知床博物館	斜里町教育委員会、斜里町立知床博物館
『第14集』（斜里町立知床博物館、1991年）	斜里町立知床博物館	斜里町教育委員会、斜里町立知床博物館
『第15集』（斜里町立知床博物館、1992年）	斜里町立知床博物館	斜里町教育委員会、斜里町立知床博物館
『第16集』（斜里町立知床博物館、1993年）	斜里町立知床博物館	斜里町教育委員会、斜里町立知床博物館
『第17集』（斜里町立知床博物館、1994年）	斜里町立知床博物館	斜里町教育委員会、斜里町立知床博物館
『第18集』（斜里町立知床博物館、1995年）	斜里町立知床博物館	斜里町教育委員会、斜里町立知床博物館
『第19集』（斜里町立知床博物館、1996年）	斜里町立知床博物館	斜里町教育委員会、斜里町立知床博物館
『第20集』（斜里町立知床博物館、1997年）	斜里町立知床博物館	斜里町教育委員会、斜里町立知床博物館
『第21集』（斜里町立知床博物館、1998年）	斜里町立知床博物館	斜里町教育委員会、斜里町立知床博物館
『第22集』（斜里町立知床博物館、1999年）	斜里町立知床博物館	斜里町教育委員会、斜里町立知床博物館
『第23集』（斜里町立知床博物館、2000年）	斜里町立知床博物館	斜里町教育委員会、斜里町立知床博物館
『第24集』（斜里町立知床博物館、2001年）	斜里町立知床博物館	斜里町教育委員会、斜里町立知床博物館
『第25集』（斜里町立知床博物館、2002年）	斜里町立知床博物館	斜里町教育委員会、斜里町立知床博物館

『第26集』（斜里町立知床博物館、2003年）	斜里町立知床博物館	斜里町教育委員会、斜里町立知床博物館
『第27集』（斜里町立知床博物館、2004年）	斜里町立知床博物館	斜里町教育委員会、斜里町立知床博物館
『第28集』（斜里町立知床博物館、2005年）	斜里町立知床博物館	斜里町教育委員会、斜里町立知床博物館
『第29集』（斜里町立知床博物館、2006年）	斜里町立知床博物館	斜里町教育委員会、斜里町立知床博物館
『第30集』（斜里町立知床博物館、2007年）	斜里町立知床博物館	斜里町教育委員会、斜里町立知床博物館
『第31集』（斜里町立知床博物館、2008年）	斜里町立知床博物館	斜里町教育委員会、斜里町立知床博物館
『第32集』（斜里町立知床博物館、2009年）	斜里町立知床博物館	斜里町教育委員会、斜里町立知床博物館
『第33集』（斜里町立知床博物館、2010年）	斜里町立知床博物館	斜里町教育委員会、斜里町立知床博物館
『第34集』（斜里町立知床博物館、2011年）	斜里町立知床博物館	斜里町教育委員会、斜里町立知床博物館
『第35集』（斜里町立知床博物館、2012年）	斜里町立知床博物館	斜里町教育委員会、斜里町立知床博物館
『第36集』（斜里町立知床博物館、2013年）	斜里町立知床博物館	斜里町教育委員会、斜里町立知床博物館
『第37集』（斜里町立知床博物館、2014年）	斜里町立知床博物館	斜里町教育委員会、斜里町立知床博物館
『第39集　特別号第２集／ダイキン』（斜里町立知床博物館、2016年）	斜里町立知床博物館	斜里町教育委員会、斜里町立知床博物館
『第40集』（斜里町立知床博物館、2017年）	斜里町立知床博物館	斜里町教育委員会、斜里町立知床博物館
『第41集』（斜里町立知床博物館、2018年）	斜里町立知床博物館	斜里町教育委員会、斜里町立知床博物館
『第42集』（斜里町立知床博物館、2019年）	斜里町立知床博物館	斜里町教育委員会、斜里町立知床博物館
『第43集』（斜里町立知床博物館、2020年）	斜里町立知床博物館	斜里町教育委員会、斜里町立知床博物館
『第44集』（斜里町立知床博物館、2021年）	斜里町立知床博物館	斜里町教育委員会、斜里町立知床博物館

2023年度　寄贈図書一覧

書名（発行所、発行年）	編著者・編集	寄贈者
『綾道－あやんつ：四島・西辺コース』（宮古島市教育委員会、2021年）	宮古島市教育委員会	宮古島多良間村
『石垣市史研究資料―10　平得の民話』（石垣市教育委員会、2023年）	石垣市教育委員会市史編集課	石垣市教育委員会
『石垣市立　八重山博物館紀要　―開館50周年記念号―』〈第27号〉（石垣市立八重山博物館、2023年）	石垣市立八重山博物館	石垣市立八重山博物館
『糸満市史　資料編13　村落資料　―旧真壁村編―』（糸満市役所、2023年）	糸満市史編集委員会	糸満市教育委員会
『おきなわ音楽の父　宮良長包ものがたり』（沖縄時事出版、2023年）	三木　健	三木　健
『沖縄県地域史協議会会誌』〈第46号〉（沖縄県地域史協議会、2023年）	沖縄県地域史協議会	沖縄県地域史協議会
『沖縄史料編集紀要』〈第46号〉（沖縄県教育庁文化財課史料編集班）	沖縄県教育庁文化財課史料編集班	沖縄県教育庁文化財課史料編集班
『沖縄大百科事典』（上・中・下・別巻、付録）（沖縄タイムス社、1983年）	沖縄大百科事典刊行事務局	佐事　安弘
『沖縄文化研究　50』（法政大学沖縄文化研究所、2023年）	法政大学沖縄文化研究所	法政大学沖縄文化研究所
『おもろさうし　下』（ゆまに書房、2023年）	名桜大学『琉球文学大系』編集刊行委員会	飯田泰彦
『学部・学科の設置目的・趣旨（2）』〈東海大学資料叢書11〉（学校法人東海大学望星学熟学園史資料センター、2023年）	学校法人東海大学学園史資料センター	学校法人東海大学学園史資料センター
『身体を彫る、世界を印す―イレズミ・タトゥーの人類学』（春風社、2022年）	山本　芳美、桑原　牧子、津村文彦	山本　芳美
『感想文集ひめゆり』〈第33号〉（ひめゆり平和祈念資料館、2022年）	ひめゆり平和祈念資料館	ひめゆり平和祈念資料館
『感想文集ひめゆり』〈第34号〉（ひめゆり平和祈念資料館、2023年）	ひめゆり平和祈念資料館	ひめゆり平和祈念資料館
『原子力文化』〈VOL.54　No.3〉（日本原子力文化財団、2023年）	日本原子力文化財団	安間　繁樹
「高度経済成長期日本の軍事化と地域社会　―石川県小松市のジェット機基地と防衛博覧会―」〔『社会学評論』〈第72巻第3号〉〔抜刷〕〕（日本社会学会、2021年）	松田　ヒロ子	松田　ヒロ子
DVD『こころのふるさと波照間島－40年の時を経て甦る祭祀の空間－』（講師：アウェハント静子、2012年）		アウェハント静子

『小浜中学校創立六十周年記念誌ふるさとの味しまくとぅば』（小浜中学校創立60周年記念事業期成会、2010年）	記念誌編集委員会	花城　正美
『崎山用正　アガリヨイ』（南山舎、2020年）	安本　千夏	農林水産課
写真『節祭　４点』2019年	土岐　令子（撮影）	土岐　令子
『重要文化財指定記念企画展　上江洲家関係資料―近世久米島の歴史と美―』（久米島博物館、2023年）	久米島博物館	久米島博物館
『首里城正殿の屋根　2022』（法政大学沖縄文化研究所、2022年）	法政大学沖縄文化研究所	法政大学沖縄文化研究所
『知床博物館　第42回特別展図録　　斜里平野の魅力～人と自然による景観形成の歴史～』（斜里町立知床博物館、2023年）	村田良介、臼井　平、三枝大悟	村田　良介
『増補改訂版　波照間島』（荒蝦夷、2023年）	加屋本　正一	加屋本　正一
『第35回平和創造展「核とミサイルと読谷村」展示資料集』（読谷村教育委員会文化振興課読谷村史編集室、2022年）	読谷村教育委員会文化振興課読谷村史編集室	読谷村教育委員会文化振興課読谷村史編集室
『竹富町立竹富小学校創立130周年記念誌うつぐみ』（竹富小学校創立130周年記念事業実行委員会、2022年）	竹富小学校創立130周年記念事業実行委員会	竹富町立竹富小学校
『多良間村村勢要覧2022』（多良間村役場、2022年）	多良間村役場	多良間村
『美ら島おきなわ文化祭2022』（沖縄県文化観光スポーツ部文化振興課、2022年）	美ら島おきなわ文化祭2022沖縄県実行委員会	沖縄県文化観光スポーツ部文化振興課
『東海大学学園史ニュース』〈No.17〉（学校法人東海大学望星学熟学園史資料センター、2023年）	学校法人東海大学学園史資料センター	学校法人東海大学学園史資料センター
「東京・立川飛行場への自衛隊移駐をめぐる基地紛争（1968 - 1978年）」［『立命館平和研究　―立命館大学国際平和ミュージアム紀要―』〈第24号〉〔抜刷〕］（立命館大学国際平和ミュージアム、2023年）	松田　ヒロ子	松田　ヒロ子
『童謡のふるさとを歩く』（プロジェクト zenko、2006年）	いらみなぜんこ	いなみなぜんこ
『とみぐすく写真アーカイブ　1　豊見城』他27冊（豊見城市教育委員会、2021年）	豊見城市教育委員会教育部文化課	豊見城市教育委員会 教育部文化課
『南島文化』〈第45号〉（沖縄国際大学総合研究機構南島文化研究所、2023年）	沖縄国際大学総合研究機構南島文化研究所	沖縄国際大学総合研究機構南島文化研究所
『南島文化研究所所報』〈第67号〉（沖縄国際大学総合研究機構南島文化研究書、2023年）	沖縄国際大学総合研究機構南島文化研究所	沖縄国際大学総合研究機構南島文化研究所

『「2022年度“ひめゆり”を伝えるワークショップ開発・実践プロジェクト報告書』の発行について』（公益財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり平和記念財団、2023年）	ひめゆり平和祈念資料館付属ひめゆり平和研究所	ひめゆり平和祈念資料館付属ひめゆり平和研究所
『年報　第32号』（ひめゆり平和祈念資料館、2021年）	ひめゆり平和祈念資料館	ひめゆり平和祈念資料館
『波照間方言　パチラームニ』（加屋本　正一、2023年）	加屋本　正一	加屋本　正一
『ひめゆり平和祈念資料館　資料館だより』（第68号）（ひめゆり平和祈念資料館、2021年）	ひめゆり平和祈念資料館	ひめゆり平和祈念資料館
『ひめゆり平和祈念資料館　資料館だより』（第69号）（ひめゆり平和祈念資料館、2022年）	ひめゆり平和祈念資料館	ひめゆり平和祈念資料館
『ひめゆり平和祈念資料館　資料館だより』（第70号）（ひめゆり平和祈念資料館、2023年）	ひめゆり平和祈念資料館	ひめゆり平和祈念資料館
『平成27年度博物館特別展　琉球弧の葬墓制―風とサンゴの弔い―』（沖縄県立博物館・美術館、2015年）	沖縄県立博物館・美術館	通事　孝作
『法政大学沖縄文化研究所蔵　琉球関係史料目録』（法政大学沖縄文化研究所、2023年）	法政大学沖縄文化研究所	法政大学沖縄文化研究所
『宮古島市史資料８　佐良浜の祭祀歌謡―モトムラのオヨシを中心に―』（宮古島市教育委員会、2023年）	宮古島市史編さん委員会	宮古島市教育委員会
『宮古島市史　第二巻　祭祀編（下）悉皆調査みやこの祭祀』（宮古島市教育委員会、2021年）	宮古島市史編さん委員会	宮古島市教育委員会
『宮古島市史　第三巻　自然編第Ⅰ部　みやこの自然　別冊』宮古島市教育委員会、2020年）	宮古島市史編さん委員会	宮古島市教育委員会
『宮古島市史　第三巻自然編　第Ⅱ部　みやこの自然と人』（宮古島市教育委員会、2023年）	宮古島市史編さん委員会	宮古島市教育委員会
『琉球の方言』（第46号）（法政大学沖縄文化研究所、2023年）	法政大学沖縄文化研究所	法政大学沖縄文化研究所
『令和５年度６月企画展「八重山の戦争展」』（八重山平和祈念館、2023年）	八重山平和祈念館	八重山平和祈念館
『歴代宝案補遺編２　歴代寶案　校訂本第２冊（活字本）』（沖縄県教育委員会、2023年）	沖縄県教育庁文化財課史料編集班	沖縄県教育庁文化財課史料編集班
『我が白浜』（白浜公民館、2021年）	「我が白浜」編集委員会	白浜公民館

2023年度 町史編集係 購入資料

①タイトル　②編著者名　③出版社　④発行年

①写真集　沖縄1935
②週刊朝日編集部・編
③朝日新聞出版
④2017年

①琉球の記憶針突(ハジチ)新版
②波平勇夫・解説、山城博明・写真
③高文研
④2023年

①リメンバリングオキナワ
②岡本尚文・編著、當間早志・監修
③トゥーヴァージンズ
④2023年

①沖縄ともろさわようこ
　女性解放の原点を求めて
②もろさわようこ・著、源啓美
　川原千春・編
③不二出版
④2023年

①琉球の祭祀植物の研究
②新里孝和・著
③むぎ社
④2023年

①絵でみる沖縄の民俗芸能
②漢那瑠美子・著
③沖縄文化社
④2023年

その他

『与那国台湾往来記』松田良孝・著、南山舎、2010年
『台湾疎開』松田良孝・著、南山舎、2013年
『沖縄新城島民俗誌—「パナリ」その光と影』植松明石・著、岩田書院、2017年
『クチとオク　住まいの民族学的研究の一視座』森隆男・著、清文堂、2017年
『朝鮮王朝実録琉球史料集成』池谷聖子・翻訳、榕樹書林、2005年
『琉球文学大学』(28) 球陽〈上〉名桜大学『琉球文学大系』編集刊行委員会・編集、波照間永吉・監修、ゆまに書房、2023年
『沖縄の生活史』石原昌家・岸正彦・監修、沖縄タイムス・編、みすず書房、2023年

《デンサ節》とその背景

西表島上原村で生まれた節歌《デンサ節》は、教訓歌として名高く、次のように歌いだします。

上原村ヌデンサ　昔カラヌデンサ　我ン心イザバ　聞キユタボリ

（上原村の《デンサ節》は　昔から伝わる《デンサ節》です　私の心を歌いますので　お聞き下さい）

グランドチャンピオン　船道亜希氏

現在《デンサ節》は、上原村のみならず、広く八重山、沖縄全域で愛唱されています。そして、《デンサ節》の歌唱を競う「デンサ節大会」も20回を重ね、昨年（2023年）は竹富町制75周年を記念して、歴代チャンピオンが出場するグランドチャンピオン大会も催されました。

《デンサ節》に関する主な資料として、次の文献が挙げられます。

- 喜舎場永珣「デンサ節」『八重山民謡誌』（沖縄タイムス社、1967年）319頁
- 新城安善「《デンサ節》を考える―八重山「教訓歌」の背景をいざなう―」（『八重山文化』〈第４号〉東京・八重山文化研究会、1976年）22頁
- 星勲「第六章　西表の俚諺」『西表島の民俗』（友古堂書店、1981年）195頁
- 「デンサー節」『日本民謡大観（沖縄奄美）』〈八重山諸島篇〉（日本放送出版協会、1989年）550頁
- 石垣金星「ディンサー節」『西表民謡誌と工工四』（西表島をほりおこす会、2006年）110頁
- 當山善堂／制作・編著「でんさ節」『精選　八重山古典民謡集』〈二〉［第２刷］（ティガネシア、2010年）132頁

1．上原村と《デンサ節》

絵画・大城正明

節歌《デンサ節》は、教訓的な内容が多く、「デンサ」(～だそうだよ、～ということです）という伝聞を意味する話し言葉の語尾を囃子詞（はやしことば）としています。それゆえに《デンサ節》には語りかけられているような親しさを覚えます。その「デンサ」も、かつて西表島では「ディンサー」とうたっていたようです。また、伝統的な西表島でのうたい方は、うたい出しの音程を下げてだす、「サギンジャシ」（下げ出し）であると、石垣金星氏は解説しています（『西表民謡誌と工工四』参照）。

《デンサ節》は、西表島上原村で誕生しましたが、広く多くの人々にうたわれています。代表的な歌詞「上原（ウイバル）ヌデンサ／昔（ムカスイ）カラヌデンサ／我（バ）ン心（グクルイ）言（シイ）ザバ／聞キユタボリ」には、自らの思いを即興的にうたう《デンサ節》の性格の一端がうかがえます。昔からうたい継がれてきた《デンサ節》といいますが、

この「昔」は何時の「昔」を指しているのでしょうか。

1768年、宮良里賢は初代上原村与人として任命されました。《デンサ節》はこのころ彼によって作られたとのことです。歌の力によって村人を教化しながら激励し、上原村の村立てに生かそうとしたことが伝えられています。

喜舎場永珣氏によると、そのころ西表島祖納に在勤中であった宮良里賢は、船浮村の景観をうたった節歌《石ぬ屏風節》もつくっています（『八重山民謡誌』参照）。この歌詞も《デンサ節》と同様、8・8・8・6音の琉歌形式であるのは、里賢に琉歌の素養があったことを物語っています。

ところで西表村には、錦芳氏の祖となる慶来慶田城用緒がアカハチ事件（1500年）の功労者であることから、彼はその後、西表首里大屋子として任命されました。それ以来、西表村は西表島西部の全域を行政区としていました。1760年に慶田城村が立てられましたが、その背景には首里王府の体制が整ってきたこともあり、西表島には石垣島の役人が赴任してくるようになりました。

西表島西部地域は、祖納半島をさらに西表村と慶田城村に分けられ、それぞれ西表首里大屋子、慶田城与人が統治したと思われます。西表村と慶田城村の境界は、両村の番所があった現・祖納公民館の東隣から、まっすぐ北泊海岸に続く道にあたります（『西表島の民俗』参照）。

そして、慶田城村の行政区は祖納の阿立（アダティ）、大立（ウフダテイ）、御仮（ウカリ）、下原（スンバレ）、真山（マヤマ）、落水（ウティミチ）、成屋（ナリヤ）、舟浮（フナウキ）、網取（アントゥリ）、鹿川（カヌカ）で、西表村の行政区は祖納の一部と、干立、多柄、浦内となりました。その後、祖納村は二つに分けられ、長いあいだ同じ敷地内に二つの番所（役所）が置かれるということが続きました。

古文献『慶来慶田城由来記』には、上のような事情が次のように記されています。

一、西表・慶田城両村之儀、昔以来ゟ西表一所に苧積屋・おいかや並作り罷在来候処、乾隆三十弐戊亥年、上原村津口所、其上ニ干立人数ゟ拾家内余ニ罷越、小村相建罷居候ニ付而、次子年首里大屋子おいかや、目差おゑかや、苧積屋引越上原ニ作り候共、名ハ代り不申来候処、乾隆四拾五戊子年、御検使御下り八重山しま村々吉悪御見分之時、慶田城村より願出、慶田城村ハ西表与改名、西表村ハ上原与改名仕、与人・目差迄改名仕、差分村建仕置候。

（西表と慶田城の両村は、むかしから西表村の一か所に苧積屋・おいかやを並べて造ってあった。しかし、乾隆三十二年〈一七六七〉に上原村には津口があり、そこに、干立村から約一〇家族を移して、小村を建てた。翌年に首里大屋子のおいかや、目差のおいかや、苧積屋も上原村に引っ越したが、名称は変わらなかった。乾隆四十五年〈一七八〇。乾隆三十三年〔一七六八〕の誤り〉に首里から御検使が下向し、八重山の村々の善し悪しを見分した時に、慶田城村から訴え出て、慶田城村は西表村と改名し、西表村は上原村と改名し、与人・目差までも改名し、区分して村建てをした。）

（石垣市総務部市史編集室『石垣市史叢書１』17頁参照）

そして、慶田城村与人・宮良里賢は王府の許しも得ないまま、1768年に西表村番所を祖納から上原に移しました。このとき慶田城村は西表村と改め、上原に移った西表村は上原村に改めるように願いでたところ、このことについては王府に認められました。つまり、現在の上原の地に引越した西表村を元の祖納の地に戻し、慶田城村を廃して新しく上原村を創建するという「村替」が行なわれたのです。その結果、慶田城村はなくなって本来の西表村となり、浦内川を村境として上原村が建てられたというわけです。

その後の上原村の繁栄を《デンサ節》は、次のように歌っています。

上原ヌ島ヤ　山島ドゥヤスンガ　住ミ馴レティカラヤ　花ヌ都
（上原という島は　山ばかりの島であるが　住み馴れてからは　花の都である）

花ユ艶勝ル　花ヌ都ヤアガメ　肝心一チ　揃ラネバナラヌ
（花は一段と美しく勝って　花の都をあがめ　村人は心を一つに　揃えねばならない）

まさに「咲く花の匂うが如き」、花の都・上原村です。後者の歌詞は、上原村を創建した里賢の気持ちを、まるで代弁しているかのようです。そんな上原村ですが、1771年の大津波（俗に「明和の大津波」）を経て、相次ぐ干ばつや台風などの自然災害や、マラリアの流行などの影響で次第に人口が減少し、上原村は1902年に廃村となってしまいました。

舞踊「上原の島節」（第20回竹富町デンサー節大会、2023年）

その一方、同時代の沖縄本島では、芝居役者・伊良波尹吉によって作られた歌劇「薬師堂」のなかで、《デンサ節》は多くの八重山メロディーとともに用いられ、人口に膾炙しました。また、沖縄芝居に端を発した歌劇「農村早起き」は八重山各地でも演じられていますが、その物語も《デンサ節》のメロディーにのって展開していきます。

その後、伝統的な《デンサ節》は、西表島の祖内・干立を中心にうたい継がれる一方、歌劇というメディアを通じて広く普及し、さまざまな歌詞も生まれました。石垣島では各家庭で一家の主が《デンサ節》をうたいながら、家族に道徳を説く光景もよく見られたようです。

ところで現在の上原村は、アジア・太平洋戦争中に鳩間島住民が疎開し、戦後もそのまま定住した鳩間人に加え、新天地を求めて移り住んだ開拓移住者たちによって復興しました。1949年には鳩間小学校分教所も設置されました。《デンサ節》を聞くと、そのような先人たちの歴史や思いも今に語り継いでいるかのようです。

「デンサ節作詞作曲益茂第５代目宮良里賢生家」碑（石垣市字登野城）

ちなみに、作者・宮良里賢は激動の西表島在勤を経て、1771年に宮良間切の頭職の御印版（いわゆる名誉職）を頂戴しますが、1773年に公用で出張中、嵐に遭って行方不明となり、不運の生涯を閉じました（享年53）。

松茂姓５代目・宮良里賢の生家は石垣市字登野城にありますが、当家の屋敷内には祖先の遺徳をしのぶ碑が建っています。《デンサ節》のメロディーとその心は、この歌碑とともに、永遠にうたい継がれていくことでしょう。

2．家庭円満の秘訣

《デンサ節》には、家庭円満の秘訣がうたわれた歌詞が数多くあります。なかでも次の歌詞は、結婚披露宴でよく引用され、「嫁の心得」として強調されます。

親子カイシャー子カラ　兄弟カイシャー弟カラ
（親子の仲がよいのは子の心掛けからで　兄弟の仲がよいのは弟の心掛けから）
キナイ持ツィカイシャー　嫁ヌ方カラ
（家庭円満であるのは　嫁の心掛けからである）

八重山方言の「カイシャー」は、文脈に応じて幅広く解釈できる言葉です。標準語に直訳すると、「美しさは」となります。ここでは「仲が良いのは」「仲睦まじいのは」と訳すと、内容に適います。

星勲氏によると、西表島祖納の慣用句に「嫁方ドゥ力」（嫁子こそ真の力）という言い方がありますが、これは嫁の力によって家庭が支えられていることを物語っています。嫁次第で家族も円満だということでしょう（以下、西表島のことわざは『西表島の民俗』から引用）。

しかし、家庭が円満であるためには、夫婦互いの理解・協力を要します。また、「夫ヤ妻頼い　妻ヤ夫支イ」（夫は妻を頼り　妻は夫が支えである）ということわざもあります。《デンサ節》は、夫婦の役割分担について、次のように歌っています。

夫ヤ家庭ヌ中柱　妻ヤ家庭ヌ鏡　黒木柱トゥ鏡ヤ　家庭ヌ栄イ
（夫は家庭の中柱で　妻は家庭の鏡である　黒木柱と鏡は　家庭の繁栄である）

ここで夫は黒木の「中柱」、妻は「家庭ヌ鏡」にたとえられています。鏡はすべてをありのままに映すものですから、「妻ヤ家庭ヌ鏡」の意味するところは、妻の立ち居振る舞いに家庭の状態すべてが表われるということを表現しています。また、家庭は夫婦関係だけでなく、親子関係や社会との関係も大切です。

島持ドゥ家持　船乗ルィドゥユヌムヌデン　舟頭舟子親子　揃ラニバナラヌ
（島（村）を治めることと家庭を営むことは　船を操ることと同じである　船頭と船子、親と子が　揃わなければならない）

上の歌詞には三つの関係性がうたわれています。すなわち、親子関係、船頭と乗組員の関係、島（村）のリーダーと村人の関係です。いずれも「ユヌムヌ」（同じ物）であると述べています。それはいずれの関係も一心同体でなければならないと説いています。

3．口は禍のもと

口は禍のもと―。知らず知らずのうちに言葉が一人歩きし、望まない事態を招いていることも多々あります。「肝思イドゥロナン出ディル」（心に思っていることが口に出る）とは言いますが、暴言、

失言、放言など、軽はずみな言動は慎むべきでしょう。このような戒めを、《デンサ節》では次のように歌っています。

言葉(ムニ)イザバ慎(ツイツイ)シミ　口(フツィ)ヌ外出(フカン)ダスナヨ　出(ン)ダシカラ又(マタ)ン　飲(ヌ)ミヌナラヌ
（言葉を発するときは慎重にしなさい　口から不用意な言葉は出すなよ　口から出した言葉は再び　飲み込むことはできない）

また、心ない言葉は時に人を傷つけるものです。西表島祖納には、《デンサ節》と似た発想で、「刀出(カタナイダ)シン納(ウサ)ミラリン　言葉(クトゥバ)ヤ口(フチィ)カイヤ戻(ムドゥ)ラヌ」（抜いた刀は鞘に納めることはできるが　いったん吐いた言葉は戻らない）ということわざがあります。これは言葉が刃物より恐ろしいものにもなりうることを示唆しつつ、むやみな放言を戒めています。

本田安次氏が、1959年に西表島干立で採集した歌詞には、次のようなものもあります（『南島採訪記』）。

舟の釘(フン)や三寸、三寸の釘しど　人や三寸の舌(シタ)しど人ゆ殺しよるデンサ
（舟づくりに用いる釘は三寸の釘であるが、人は三寸の舌で人を殺すこともできる）

車(クルマ)ヤ三寸(ミブシィ)ヌ楔(フサビ)シドゥ　千里ヌ道ン走リ巡ル　人ヤ三寸ヌ舌シドゥ　大胴(ウフドゥ)ヤ食(ファ)イシティ
（車は心棒にある三寸の楔で　千里の道も走り巡ることができる　人は三寸の舌で　身をほろぼしてしまう）

後者の「大胴(ウフドゥ)ヤ食(ファ)イシティ」を直訳すると「身体を食って」ですが、転じて「身を滅ぼして」という意味になります。前者の「舟ぬ釘」だけではなく、車の心棒を支える後者の楔(くさび)も、たった三寸の長さであるが、舟や車にとって重要な役割を果たしていることを表しています。

また、口先だけでうまく相手をあしらうことを「舌先三寸」と言いますが、ここではたった三寸の舌、すなわち言葉が人を殺めたり、我が身を滅ぼしたりするほどで、たとえ「舌先三寸」でもその影響力は大きいといえます。西表島祖納で、「舌(シィター)　憂(ウ)イ事(クトゥ)ヌ起(ウ)キ根(ニー)」（舌は憂い事の起き根）というのも、長舌口広は人を殺し、さらには自分をも殺してしまいかねないということです。このようなことを踏まえると、《デンサ節》が、「陰口」をたたく人を「鬼」と断言するのも首肯できます。

人(ピトゥ)ヌ事(クトゥ)言(イ)ズスヤ　我事(バークトゥ)ン話(バナ)シィン　世間(シキン)ニウル鬼(ウン)ヤ　是(ク)リドゥヤユル
（人のことを言う人は　私のことも話していることだろう　世間にいう鬼とは　まさにこのことである）

沖縄本島には、「言葉銭使(クトゥバジンチケー)」ということわざがあります。これは言葉はお金と同様、使い方次第で良くも悪くもなるということです。つまり、生かすも殺すも「舌先三寸」次第だということです。落語などの語り芸を舌耕芸ともいいますが、同じ舌を使って語るなら、田畑をこつこつ耕して作物を作るように人の心を耕し、そして花を咲かせ、稔りと喜びをもたらすように舌を使っていきたいものです。「言葉(クトゥバ)ドゥ祝儀(シュンギ)」（言葉こそ祝儀である）ではありませんが、私たちは人の心を明るくするような言葉を使っていきたいものです。

4．職分を果たす

人ヤ親ママドゥナルスヤ　妻 夫ヤ定ミョウル　我ヌママドゥナルスヤ　犬トゥユヌムヌ
（人は親の決めた通りに　夫婦と定められるのである　自分の思い通りの結婚は　犬と同じである）

《デンサ節》は、かつての儒教的な倫理観が思想背景としてあるために、今日の時代感覚にそぐわない、上のような歌詞もみられます。

ここでは結婚する当人同士の意志よりも、かつての婚姻習俗において親権に絶大な力があったことがうかがえます。つまり、「親ヌ声や神ヌ声」ではありませんが、結婚は親の意見に従うべし、というのです。それにしても結句「犬トゥユヌムヌ」とは言い過ぎのような印象を受けます。

この結句は、ほとんどの歌集で「犬畜生と同様」と解釈されているところをみると、犬を白眼視していることがわかります。これではあまりにも犬に失礼ではないでしょうか。犬には犬の「シュクブン」（職分、役割）があり、それを尊重したいものです。

その点で、次の歌詞は傾聴に値します（『南島採訪記』）。

鶏ヤ時トゥル職分　犬ヤ家ヌ番 職分　人ヌ徒ラナルスゥヤ　世間ヌ世捨
（鶏は時を告げるのが職分　犬は家の番をするのが職分　人として役に立たない者は　世間から見捨てられる）

ここでは誇り高く犬の「家ヌ番」としての職分を訴えています。その一方で、人間様でも「徒ラナルスゥ」（役に立たない者）は「世間から見捨てられる」というのは面白い見方です。

新城安善氏は、《デンサ節》にうたわれた徳目が、江戸時代の儒学者・貝原益軒の教育思想と大きく重なることを指摘しています。貝原益軒は「職分」について、次のように述べています。

凡 物 各職分あり。犬の夜を守り、鶏の晨をつかさどるも亦 職分なり。禽獣 猶かくの如し。況人をや
（すべてのものにそれぞれ職分がある。犬は夜を守り、鶏は朝をつかさどるのもまた職分である。やはり鳥獣もこの通りである。まして人ならなおさらである）

八重山では村の組織や祭祀を営むにあたって、個々の職分をしっかり果たすことが重要になってきます。また「家ヌ舵取レー 妻 方」（家庭の舵取りは妻である）という言葉を挙げるまでもなく、家庭内でも夫婦、親子、兄弟といった関係においても、それぞれの役割がみられのではないでしょうか。

「親子カイシャー子カラ／兄弟カイシャー 弟カラ／キナイ持ツィカイシャー／嫁ヌ子カラ」、「夫ヤ家庭ヌ中柱 ／ 妻ヤ家庭ヌ鏡 ／黒木柱トゥ鏡ヤ／家庭ヌ栄イ」、「島持ドゥ家持／船乗ルィドゥユヌムヌデン／舟頭舟子 親子 ／揃ラニバナラヌ」などの、家庭円満の秘訣をうたった《デンサ節》の歌詞群も、視点をかえてみると、それぞれが職分を果たすことの大切さを説いているようにも思われます。

5．年寄りと若者

八重山では、「老人ヤ家内ヌ宝」（老人は家庭の宝）といって、伝統的に「老賓　上座　案内シ」（老賓を上座に迎える）習慣があります。そして、若者は長寿と豊かな人生経験、さらにはその知恵にあやかろうとするのです。

「長者」（鳩間島結願祭、2012年）

舞踊「山崎のアブシャーマ」
（竹富町婦人連合会芸能大会、2016年）

その一方で、年寄りと若者がお互いに、「若サトゥ老人ヌ思イヌマトゥマラン」（若者と年寄りの意見は一致しない）というのも現実問題としてよく聞くことです。令和時代においては、とりわけ年寄りと若者では、それぞれに育ってきた時代や環境が大きく異なっているので、なかなか以心伝心とはいかないこともありそうのです。

また世の中には、儀礼的な狂言の冒頭に登場して五穀豊穣をもたらすような、神さびて威厳のある翁ばかりではなく、「山崎ぬアブジャーマ」系の翁も昔から大勢いらっしゃったようです。

妻のいない年寄り男に、「背負イフドゥバシ嫁バシ」（背負い育てて嫁にしなさい）ということは、どこかの乳飲み子を子守りしながら、その子を嫁に迎えなさいということです。年寄りが若妻を求めた結果どうなるのか、《デンサ節》は次のように歌っています。

我ヤ言葉聞チャン　年　寄ヌシャ　　ル事ヌ　若妻　求メティ　妻替イ　　ヌ果ティヌ
（私は（先賢の）言葉を聞いてきたが　年寄の身をくずした原因は　若妻を求めて　妻替えが果てないのである）

すなわち年寄りが若い妻を求めるあまり、「妻替え」（離婚）が絶えないというのです。ここで「年寄」は妻のいない年老いた男性を指しています。また、夫婦の年齢のバランスについて、次のようにも歌っています。

人ヌ妻夫婦　夫婦似ドゥ美シャル　年寄リャトゥ若者ー　ウツランムヌサミ
（人の夫婦で　夫婦はつり合いのとれたのが良い　老人と若者（若妻）は　不似合いである）

上の《デンサ節》は、年齢的にもバランスのとれた夫婦を理想としています。末句の「ウツラン」は、八重山方言の動詞「ウツルン」（写る）の未然形で、似合わないというニュアンスがあります。恋愛に年の差は関係なく、「年の差婚」が流行するこのご時世。「妻　宝蔵バ下イ」という言葉もあるように、若い妻を煙草入れ（宝蔵）のように肌身離さず持ち歩くような「年寄」の姿も、なかなか微笑ましいものです。しかし、年の差カップルであるほど、その夫（「年寄」）は、「妻ヌ尻敷ケー」（妻の尻敷き）となる傾向があるとかないとか、その真相はいかがなものでしょうか。

6．《デンサ節》の女性像

《西表口説》には、「海井戸玉水汲ミトゥユル／花ヌ乙女ウシ連リティ／恋シ歌声／聞チ美ラサ」（海井戸の玉水を汲みあげる／花の乙女たちの連れあって／愛しい歌声のなんと美しいことよ）という一節があります。この詞章からは、海井戸の水汲みに集う乙女たちのにぎやかな歌声が聞こえてくるようです。あちこちの井戸端でも同様に、乙女たちによる噂話に花が咲いたことでしょう。

西表島祖納の海井戸

その噂話も過ぎると、それが原因で問答（争い）に発展することもあります。「問答起クシヌ良ー事ヌアンナ」（問答〈争い〉を起こすのは良いことはありません）というのも当然でしょう。《デンサ節》では、問答を起こさないように、油断するなと戒めています。

井戸油断ショール女　道油断ショール女子　是リカラドゥ極ミティ　問答ヤクヌミョール
（井戸で油断する女　道で油断する女は　ここから極まって　問答〈争い〉を企んでいるのである）

ここでは井戸端での油断だけでなく、道でおしゃべりする女子が原因で争いが始まるとまでいっています。また、昭和30年代に本田安次氏が干立で採集した《デンサ節》には、家廻りをする女性や、訪問先で長居する女性も登場します。

家廻リシヨル女、長坐リシヨル女、着物ヤ無ぬ女、キハミテ借ヒ着ル
（家まわりをする女、長居する女、着物のない女は、ここから極まって借りた着物である）

ここにもおしゃべりな女性の顔がちらつきます。「言葉は慎むべし」というのも《デンサ節》のテーマの一つにちがいありませんが、女性ばかりがおしゃべりであるような印象も見受けられます。

以上のように《デンサ節》では、理想の女性像が歌われるというよりも、女性の良くない行動や態度が、悪い結果を招くといった内容の歌詞がいくつもみられます。次の歌詞は、その典型であるといえるでしょう。

朝寝ショウル女性　朝引キショウル女　ウリカラドゥ極ミティ　夫ヤ油断シミショル
（朝寝坊する女性と　朝食の芋を朝掘りに行く婦人　ここから極まって　夫は油断してしまう）

夫の怠惰の原因をすべて女性の「朝寝」「朝引き」といった素行に求めるのもどうかと思います。また次の歌詞は、上句がそのままことわざになって、広く知られています。

パラ高舟ヤ島トゥラヌ　肝高女ヤ家持ツァヌ　ドゥグヌ肝高サ　灰ニドゥクルビョル
（帆柱の高すぎる船は〈不安定で〉島に安着しない　高慢な女は家庭を営めない　あまりの傲慢さのために

灰まみれになる）

ちなみに「肝高」の語は、首里王府が編集した神歌集『おもろさうし』では、「心が高く優れている」が原義で勝連グスクの美称辞になっていますが（『沖縄古語大辞典』参照）、ここでいう「肝高」は「おごりたかぶる」という良くないイメージを表わしています。

これらのように、《デンサ節》では婦女子の徳化を目的とするあまり、女性の悪いところばかりに注目しているかのようです。しかし、《デンサ節》の作者と伝えられる宮良里賢は、《石ぬ屏風節》では「舟浮(フナキ)クバディサヤ／枝持(ユダム)チ(チュ)ヌ美ラサ／舟浮乙女(フナキミヤラビ)ヤ／身持(ミモ)チ(チュ)美ラサ」（舟浮クバディサの木は／枝振りの美しさよ／舟浮乙女は／身持ちが美しい）とうたっています。つまり、女性は身持ち（品性）が大切であるということを言いたかったのではないでしょうか。

7．《デンサ節》の本領

今一度、《デンサ節》が誕生した歴史的な背景を考えると、琉球王府が教育を重視した社会状況があったのではないかと思います。

程順即（名護親方）は、1708年に中国から『六諭衍義』を複製して持ち帰り、その内容を琉歌によって広く普及しようとしました。そのとき「子孫寄言(ユシグトゥ)ヤ／油断(ユダン)ドモスルナ／命チナガスル／営ト思レ」（子孫の教育は／怠ってはならない／それは自分の家系を子々孫々につないでいくための／営みと思いなさい）と詠んだように、人が人として生きていくには、教育が不可欠であると説いています。そして1718年には、沖縄初の学校「明倫堂」を創建しました。

八重山でも人材育成をはじめとする、文教政策がとられ、1725年に士族の子弟たちが教育する会所（学校）がはじめて創設されました。このような潮流を思うと、次の歌詞に込められた思いもよく理解できます。

デンサ節作(ブスィツィク)リ　童子(ヤラビ)ヌメーニ言(ユマ)シ　世間(シキン)ヌ戒(イマ)シミナルスドゥ　我(バ)ンヤ願(ニガ)ユル
（《デンサ節》を作って　子どもたちに歌わしめ　世間の戒めになるのを　私は願っている）

音(ウトゥ)ニトゥユマルデンサ節　島(シィマ)ヌ守(マム)リデ磨(ミガ)キツケ　イツマディン子孫(ファーマー)ニ　歌イツガナ
（名高い《デンサ節》は　島の守りの要であるので大切に磨き　いつまでも子孫に　うたい継いでいこう）

《デンサ節》は、さまざまな内容がうたわれていますが、なんといっても教訓的な内容が本領でしょう。

上原(ウイバル)ヌデンサ　昔(ムカスィ)カラヌデンサ　島(スィマ)ヌアルマディヤ　イツィン変(カ)ワラヌ
（上原村の《デンサ節》は　昔から伝わる歌である　島のある限り　いつまでも変らぬ教訓歌である）

このように改めて歌うのも、《デンサ節》が過去・現在・未来をつなぐ役割を担っているからではないでしょうか。その鍵を握るのは、やはり島の子どもたちでしょう。大田綾子氏は、次のように歌っています（2007年）。

天ヌ星ヌ数マサル　童ンターヌ真サ心　島ヌ宝ディ磨　輝シタボリ

「童ンター」の「真サ心」は未知の可能性を秘め、磨けば輝く原石であり、まさに「島ヌ宝」といえるでしょう。「星」「宝」「磨く」「輝らす」といったキーワードを散りばめたこの歌は、上原小学校の敷地内で星のかたちの歌碑となって、キラキラ輝いています。また、島の子どもたちのなかは、これからの人生で困難につきあたったとき、この《デンサ節》を口ずさむことによって救われることも多々あるものと思います。

ところで、《デンサ節》の代表的な次の歌詞も、世を渡る術を教えてくれます。

上原小学校の《デンサ節》歌碑

人ヌ大胴ヤ愛サネヌ　肝心ドゥ愛サル　肝心 良持ツァバドゥ　世間ヤ渡ラリ

（人の身体は愛しいのではない　心こそが愛しいのである　良い心を持ってこそ　世間を渡っていける）

《デンサ節》の歌詞は、そのまま八重山のことわざとして定着しているものも少なくありません。「親ヌ声ヤ神ヌ声」（親の声は神の声）、「人ヌ夫 婦ヤ天カラドゥ生リ」（夫婦は天からの生まれ）、「親子 美シャヤ子カラ」（親子が仲睦ましいのは子の心がけから）などは、《デンサ節》の歌詞が先なのか、ことわざが先なのか判然としませんが、両者は隣接した関係であることが指摘できます。いずれにしても、《デンサ節》を口ずさみ、自ら鼓舞することのできるのは、島人ならではの処世術だといえるでしょう。

私たちは昔から伝わる《デンサ節》を、心の糧として現在に生かして共有し、未来へと大切に歌い継いでいきたいものです。

昔 人ヌ謡心　島ヌ為ニドゥ残ショータ　今日ヌ嬉シャヤ　我ケーラ幾世マディン

（昔の人が謡心を　島のためにこそ残してきた　今日の嬉しさは　私たち皆の未来までも）

（飯田泰彦）

＊　本稿は、2017年に12年ぶりに復活開催された「第16回デンサ節大会」に際し、「《デンサ節》の心―第16回デンサ節大会に寄せて―」と題した拙文（『八重山毎日新聞』2017年６月16－22日掲載）をもとに、新たな項目を加え、なるべく根拠となる資料を明示しながら再構成しました。

燐鉱石の権威 波照間燐鉱で頓挫・幕引き

西前津　松　市

戦前、波照間島で燐鉱採掘を手がけた一人・恒藤規隆の『予と燐鉱の探検』（昭和11年１月１日発行）を、たまたま読んだ。それによると、発行前年４月10日に恒藤は波照間島に渡っている。四度目の視察であり、それが最後となった。

日本最初の農学博士の一人であり、日本における土壌学の創始者とされる恒藤は「農村更正の方策は（中略）燐酸肥料を安価に供給して食糧其他の農産物の増殖を計ることは極めて肝要」と燐鉱石の確保に強い使命感をもち、燐鉱床探査・採掘に人生の大部分をかけた。二度の欧米での長期に亘る燐鉱産地の視察・調査研究、燐鉱石を求めて日本国内各地をはじめフィリピン方面まで出掛ける行動力は本の題名にあるようにまさしく「探検」であり、あるいは冒険にも近いもので、実際生死を脅かされる出来事に幾度も遭遇している。先を遮るものなどなきが如くに燐鉱石を求めて南シナ海まで南下するさまは、南洋諸島を版図に組み込む等、領土拡大をめざす大日本帝国主義の姿と重なる。国策の一環の性質を帯びた経済的なそれと位置づけられるだろう。

自ら発見したラサ島（沖大東島）の燐鉱石の大量な採掘でわが世の春を謳歌した彼だが、燐鉱石の減少により1928年（昭和３）12月にラサ島鉱業所が閉鎖すると、新天地波照間島に目を向ける。

以下、先の『予と燐鉱の探検』中「波照間島燐鉱開発着手」の見出しで始まる段から若干抜き出す。恒藤は根岸外嘱託等複数人を十数回にわたって波照間に送り込み、調査に当たらせているが、紙幅の都合上それらは割愛する。

昭和３年３月中

「與論島燐鉱調査の爲出張中、那覇市にて共同鉱業権者なる鹽(塩)谷東一郎氏に會見の節、同氏は、石垣島近くに在る波照間と云ふ島には燐鉱が出るやうに思ふとのことであった」

昭和４年２月８日附

「同氏（鹽谷東一郎）は帰郷後（石垣島）、同島（波照間島）に渡り、調査の上鉱石の見本を取り、報告と共に送って来た（中略）正しく燐鉱であった」

昭和４年５月１日

「予と越壽三郎氏（信越窒素肥料株式会社社長）と共同出資で波照間燐鉱採掘事務所を為すため、肥料鉱物調査組合を組織した」

昭和四年五月三十日付『先島朝日新聞』に次のようにある。

「波照間島が全島燐鉱であることを発見したのは塩谷東一郎氏で、高田商店主の兄であるが試掘の結果二十八％の含量（中略）ラサ島の十五倍も産額ある見込みであるさうである。来月中旬頃、燐鉱のオーソナリチーたる恒藤（規隆）博士一行も来島することに電報があったさうで愈々採掘することになるらしい。然うするとラサ島の無電も移転することにならうからと喜んでいる人が多い」と、波照間燐鉱への期待の大きさがうかがえる。

昭和４年６月17日

「予は信越窒素側の人と共に波照間島を実地視察する為め出発（中略）七月一日一行は波照間島に着き、概略調査の上、五日退島」（最初の視察）

「鹽谷東一郎氏は（中略）氏自身及その弟にて石垣島に雑貨商を営んで居る榮二氏並に懇意なる波照間島の仲本信幸、石野富造、田福道弘氏と共に五鉱区の試掘出願を為して置いたが、予と先方代表者たる鹽谷氏との話合の上、前記鉱区を（中略）予と是等諸氏と共同権利の出願を為した」（最初の視察の折）

昭和４年８月１日

「與論島及び波照間島の燐鉱採掘の業を打って一丸とし事業経営をなすべく日本燐鉱株式会社創立事務所を設ける」

昭和５年１月28日

「鹽谷栄二氏は会社設立協議の爲め上京されたが、同氏の申出を悉く容れるわけに行かぬので不調に終り（後略）」

昭和６年３月16日

「再度の調査をなすべく東京出発（中略）波照間島に三月二十八日着（台湾経由。二度目の視察）し、（中略）島内を隈なく調べ四月二十二日出帆」

昭和６年７月18日

「同島の有志仲本信幸氏と打合事項があったので同氏の上京を促し（たところ）七月十八日上京（中略）氏（仲本信幸）は七月二十九日根岸氏と同道」波照間島に向かった。根岸氏は「単身予の第一採掘鉱区内を始め島内各所出来るだけの調査を為した」

昭和７年４月27日

「波照間島の調査事業は鹽谷氏との係争事件もありたる関係上一時休止する事とし、根岸氏を帰京せしむる」

昭和７年11月４日

「予と鹽谷氏等と共同所有の波照間島燐鉱の内、第一鉱区と称する島の最中央に位する（中略）鉱区に関し係争問題を惹起するに至つたが、昭和七年十一月四日大審院に於て（中略）予の勝訴に帰し決着を告げた」

「鹽谷氏等と関係せる第二、第三、第四の三鉱区は当時予は有望ならずと見込みをつけて（中略）権利を放棄した」

昭和９年１月12日

「自ら実地視察の必要を感じ、川崎隆一氏及び三成辰雄氏を同伴（中略）東京出発（中略）台湾経由で波照間には一月十二日着き、二月七日まで視察（三度目の視察）鹿児島経由で同月十八日帰京」

昭和９年４月

「利根式試錐機を（中略）飯野氏に携帯渡島させて要所を開掘して見た」

塩谷東一郎側は1934年（昭和９）４月以降、朝日化学肥料株式会社との間に採掘協定を締結し、採掘に乗り出す。

昭和９年４月26日

「切通唐代彦氏を波照間島出張所長に任命し赴任の爲出発せしめた」

昭和９年10月初

「切通所長に電命して桟橋、海岸貯鉱場、山元乾燥場、同貯鉱場、軌道の工事、レールの敷設等を急がせ」ていたが、その工事が始まる。翌十年四月初旬完成。

昭和10年３月24日

「嘱託佐伯健吉を同伴して東京出発（中略）四月十日渡島（中略）島内産地を隈なく視察して同四月十八日島を立ち（後略）」（四度目の視察）

「右の通り昭和四年以来、同島の燐鉱について調査を施行して居つたるも未だ大量産出地は発見するに至らなかつた事は返す返すも遺憾千万である（中略）予の採掘鉱区に隣接する不登流茂知原方面(鹽谷から事業を受け継いだ朝日化学肥料株式会社採掘)には上層又は中層に高度の燐鉱が産出するが(中略）本源というものは、どう考へても現在の予の採掘鉱区でなくてはならぬ。さう云う譯で我が鉱区中の或る地域に此の種の高度燐鉱が産出するということを忘却してはならぬ」

四度目の視察（最終回）のくだりで恒藤は、期待する隣鉱山床を見いだせずにいることを「遺憾千万」と表現しているが、そのことに関して仲本信幸は、「慶原山台地（第一鉱区）に溜まった鳥糞は北西方面へ流れて、その方面に大きな鉱床があることを主張した。根岸君は、ここでも私に反対して、自分は慶原山を中心に調査すると言い出したが、間もなく東京へ戻ってしまった。その後彼は来島せず、後継者が次々に代わって、慶原山を東端にして、島の中央を東西に幅広く鉱区をのばして採掘に着手した。この鉱区から外れた北方台地で、恒藤氏から離れた塩谷氏によって、大きな鉱床が発見され、塩谷氏と結んだ朝日化学肥料会社によって採掘されたのがいわゆるフトルブチ（不登流茂知）である。もし根岸君が、私の意見を尊重してこの台地を調査しておれば、朝日化学肥料会社の進出はなかったであろう」（『燐鉱調査に伴う水資源の発見』昭和52年12月９日）。

『予と燐鉱の探検』の昭和７年11月４日の条に「鹽谷氏等と関係せる第二、第三、第四の三鉱区は当時予は有望ならずと見込みをつけて（中略）権利を放棄した」とあるが、調査の要の「根岸君」と彼を信頼する恒藤にとって「第一鉱区」とその延長東西ラインこそ唯一無二の本命であったのだろう（フカ集落後方フカヌシィーバルでの小規模採掘はあったようだ)。燐鉱事業の権威恒藤規隆にとって波照間燐鉱は最終章とも位置づけられたわけだが、朝日化学肥料会社の相当量の採掘を横目に頓挫し幕引きに向かう。玉城功一によると恒藤側は「昭和14年頃から採算の見通しなく中止状態」とある。

ところで恒藤の人脈は幅広い。ラサ島開発10周年記念祝賀会に首相原敬を招待する等政財界要人との交流、沖縄県知事奈良原繁、大東島開拓の先駆者玉置半右衛門、尖閣諸島の古賀辰四郎、そして石垣島在住岩崎卓爾等々への協力取付け等である。『先島朝日新聞』昭和７年12月13日付に「恒藤則隆氏より岩崎卓爾翁に寄せられたる書簡」が転載されている。鉱区をめぐる「繋争事件」の終結（那覇地裁時点）報告の後に波照間燐鉱の意義深さを強調、続けて「波照間島御視察御希望の節は（中略）御迎えの為め波照間島より石垣島へ発動機船を差向けの手配可仕候」とある。天文屋ヌ御主前とも呼ばれた彼は、八重山社会における指折りの有力者であったのだろう。

インターネットで恒藤規隆を検索すると、場違い的に宮沢賢治との関係を取り上げたものがあった。それによると、恒藤は盛岡高等農林学校の教授陣にも名を連ね、毎年期末には集中講義＜土壌及び肥料＞を担当しており、それは２年生の配当科目だったので同校に在籍した宮沢賢治も受講していたようだ。また賢治は卒業後も＜地質土壌、肥料＞研究の研究生として続けて在学することが許され、

加えて盛岡高等農林学校実験指導助手を委嘱されたともある。都合４年余、研究内容が共通することもあり、二人の接触は幾度もあったであろうと紹介されていた。

そこで唐突に宮沢賢治の『銀河鉄道の夜』を思った。恒藤は「予が沖縄縣下の諸島を探検の際（明治40年）、航海中島影（波照間島）を認めて居つた島であるが、其の時上陸はしなかつた」と記したが、恒藤はその前後の夜に船上から天の川（銀河）を仰がなかっただろうか。日本のずっと南方でしか見ることの叶わない南十字星を目にしなかっただろうか。そのときのことを星空・星座好きの賢治に話さなかっただろうか。『銀河鉄道の夜』には「燐鉱の三角標」や「黒曜石（でできた黒板）」、「硫黄（のほのほのやうな）」、「月長石（ででも刻まれたやうな）」等鉱物そのものや鉱物を用いた比喩表現が多く見られるが、だいたい天空の星座と地下の鉱物はイメージ的にどこか似通ってないだろうか。恒藤が天の川（銀河）を、『銀河鉄道の夜』中最も特別な星「南十字星」を賢治に熱く語って聞かせた可能性はないだろうか。荒唐無稽にもそう想像しつつ闇夜の洋上に横たわる波照間島の遥か高みに天の川（銀河）と一等輝く南十字星を思った次第である。

バジィラの両義性

西前津　松　市

体長40cmに達することもある日本最大のトカゲ・キシノウエトカゲを波照間島ではバジィラと呼び、土地改良以前にはごく普通に目にした。学校の休み時間に校長宿舎の石垣の隙間からバッタを餌に釣り上げ、ずっしりした重量感に悲鳴を上げたこともあった。

久貝勝盛氏によると、バジィラを宮古佐良浜ではハイヌグルクン（畑のグルクン）、宮古伊良部ではパリヌカタカス（畑のカタカシ・魚類ヒメジ科）と呼ぶようだ。いかにも丸々と肉厚のグルクンを彷彿させないこともないし、頭部の輪郭や肌の色具合がカタカシの印象と重ならないこともない。長年波照間島で神司を務めた私の伯母は、バジィラが海に入ってカタカシに成り代わったと信じていたようで、そのため魚肉好きではあったが、カタカシだけは決して口にしなかった。

異形なるものは得てして神格化する。波照間島では千年生き延びたバジィラは、尾を二つもつヨーチラという化け物になるとの伝承がある。「ヨーチラが暴れだすと、周囲の草木をはじめ自然物が一つになって『ヨーヨー』と音を立てて人間の進退をまどわせ」（『仲本信幸遺稿集』）たり、ヤシガニが捕れない晩はヨーチラがヤシガニを数多く引き連れているが、人間が欲張ってそのヤシガニを根こそぎ取ってしまうと、「ヨッチラは怒って人間にとびかかり、かみ殺してしまう」（大嵩のおばあさん）とすさまじい迫力ぶりである。また、このヨーチラに股下を潜られたら死を免れないと言われており、先輩たちからは潜らせまいとして悪戦苦闘した等の嘘八百（今思えば）を聞かされていたものだから、野道で出くわすと勢い幼い股を必死に閉じたこともあった。

「春先の好天気が続き、霧が多い晩に、島内にある凹地やアブ（洞穴）等で、ヨーヨーと大声で鳴く声が聞こえることがあり、島ではヨーチラの鳴き声と言って恐れられている」（前掲書））。ここには凹地やアブ（洞穴）の向こう側異界からこの世に姿を現す直前のヨーチラの気配に息を潜める島人の心性がうかがえる。「春先」にとあるが、先の久貝勝盛氏は「体温調節機能を持たない平温動物」のキシノウエトカゲは「春先になると日光浴をして体温を上昇させる」とあるので、仲本信幸氏の記述もキシノウエトカゲの生態に合致する。ちなみに「ヨーヨー」と鳴く声を町史編集委員の島村賢正氏は「クイナの鳴き声だろう」と推測する。

ところで、バジィラは忌むべき存在に留まらない。「この二又の尾をもつバジラを漁の宿泊所に置くと大漁するという話があり、一度他からもらって進幸丸の工場（納屋）に置いたが、素晴らしい大漁であった」とカツオ船船主であった仲本氏は続ける。バジィラは縁起の悪さと良さの両義性を有するもののようだ。豊漁からしても、やはり海との因縁だろう。あるいは地下深くの海に似た異界を行き来するのだろうか。

バジィラの現在だが、インターネットで検索すると、波照間島では1982年以降バジィラが目撃されていないとあったので、昨晩波照間在住の知人にその旨話すと、いや、今年 YK が見ている。それも集落内だと意外なことを教えてくれた。40年の空白が何かおとぎ話めいているが、なんとも喜ばしいホッカホッカの最新情報だろう。

竹富町史編集係業務日誌抄 2023年度

4／1　野田有、社会文化課町史編集係に配属。

4／17　『竹富町史だより』〈第51号〉竹富町ホームページに掲載。

4／28　波照間純一氏より原稿「竹富町の漁業」（『竹富町史だより』掲載予定）受理。

5／29　資料使用・転載許可申請受付『竹富町史　第十二巻　資料編　戦争体験記録』に掲載の体験記録より10件許可。

5／31　西前津松市氏より原稿「屋号について二題」（『竹富町史だより』〈第52号〉）受理。

6／1　『沖縄県地域史協議会』〈第46号〉刊行。20－23頁に「竹富町史」掲載。

6／9　石垣久雄氏より『竹富町史』合冊本の原稿「刊行に寄せて」（仮題）受理。

6／11　竹富町球技大会、スタッフ。

6／14　白保中学校、平和学習講師。「戦争をうたったトゥバラーマ」（飯田泰彦）。

6／22　ブックスタート in 黒島（米盛恭子）。

6／26　ブックスタート in 小浜島（米盛恭子）。

6／27　八重山博物館収蔵庫見学（飯田、教育委員会他４人）。

6／28　八重山博物館収蔵庫見学（米盛、教育委員会他５人）。

7／2　竹富町制75周年式典スタッフ（米盛恭子）。

7／13　資料使用・転載許可申請受付。『竹富町史だより』掲載の「船舶、港」に関する写真８点許可。

7／18　竹富島試掘（飯田泰彦、野田有）。

7／19　竹富島試掘（米盛恭子）。

7／21　沖縄県地域史協議会総会・研修。米盛恭子、リモート参加。

7／21　新川小学校教員研修講師。飯田泰彦「八重山のまつり」。

7／21　資料使用・転載許可申請受付。「忘勿石」の写真（竹富町史所蔵）１点許可。

7／28　自然編小委員会開催（新本光孝氏、島村賢正氏、上江洲儀正氏）。

竹富島試掘

7／29　第20回竹富町デンサ節大会。スタッフ。

7／31　町史編集係にテレビモニター設置。

8／1　石垣佳彦氏に、瀬戸弘氏の写真借用・使用を申請。→８／２許可。

8／4　波照間純一「波照間島周辺海域の定置網漁業の試験操作について」（改稿原稿受理）。

8／8　『竹富町史だより』〈第52号〉印刷製本請負業務契約。

8／9　斜里町立知床博物館に「姉妹町盟約締結調印式」の写真借用・使用を申請。→８／10許可。

8／13　竹富町三世代ゲートボール。スタッフ（米盛恭子）。

8／18　第45回竹富町史編集委員会開催。

8／20　「ぱいぬ島まつり」スタッフ。『竹富町史だより』〈第52号〉刊行。

9／1　『竹富町史だより』〈第52号〉竹富町ホームページに掲載。

9／11　東海大学農学部総合実習（於・会議室）で「伝統行事概要」解説（飯田泰彦）。

9／14　台湾国立交通大学「植松明石文庫」データベース・アーカイブ事業に参加（米盛恭子）。→9／18。

9／19　米盛恭子「復命書」（台湾国立交通大学「植松明石文庫」データベース・アーカイブ事業）提出。

9／25　竹富町史収蔵写真アーカイブ事業「マウスライオン」（代表／眞栄田義央）と契約。

10／8　『本盛秀生誕百年公演　秀風報恩』〈パンフレット〉に「本盛秀師匠の「稽古」」（飯田泰彦）掲載。

10／16　三枝大悟（斜里町立知床博物館学芸員）「書評『竹富町史だより』〈第52号〉を読んで」、『八重山毎日新聞』に掲載。

11／8　石垣久雄委員長、令和５年度沖縄県文化功労賞受賞。

10／20　波照間純一氏より原稿「八重山地区漁業協同組合及び漁業権漁場の変遷」受理。

10／22　竹富町公民館連合会創立50周年記念式典・祝賀会スタッフ（飯田泰彦）。

10／26　職員ＤＸ研修（於・３階大会議室）。

11／6　「第46回竹富町史編集委員会の開催について（通知）」（竹教委社文第608号）。

11／10　波照間純一氏より原稿「八重山地区漁業協同組合及び漁業権の変遷について」受理。

11／14　米盛恭子「リレーエッセイ３　植松明石資料の台湾調査に参加して」、『八重山毎日新聞』に掲載。

11／18　公民館大会スタッフ（米盛恭子）

11／18　飯田泰彦「誘い　第９回竹富町婦人連合会芸能大会「さにんばな」誘い」『八重山毎日新聞』に掲載。

11／29　『竹富町史だより』〈第53号〉印刷製本請負契約を八島印刷交わす。

11／30　南山舎と『竹富町史　第八巻　西表島』〈上巻〉再構成、補修正契約を交わす。

12／1　第46回竹富町史編集委員会開催（於・４階会議室）。

12／7　沖縄県地域史協議会出席（飯田泰彦）。→12／８、本島内の竹富町関連資料の確認。

12／9　スマムニ大会スタッフ。飯田泰彦、米盛恭子。

12／15　西前津松市市より原稿「バジィラの両義性」受理。

1／18　西前津松市氏より原稿「燐鉱石の権威 波照間の燐鉱で頓座・幕引き」受理。

2／2　竹富町史編集委員会・西里喜行氏逝去。

2／10　ヤマネコマラソン、スタッフ。

2／20　「斜里町・竹富町姉妹町盟約50周年事業　職員交流事業」。社会文化課課長・登野盛恒雄、他社会文化課係長３名が北海道斜里町を訪問（→２／24）。２月22日、斜里町立知床博物館にて、「竹富島の種子取祭」（飯田泰彦）

2／28　『竹富町史だより』〈第53号〉刊行。

3／8　「斜里町・竹富町姉妹町盟約50周年事業　交流の歩み写真展」（於・竹富島「ゆがふ館」）。

3／10　「すんがに歌き遊び講演会」（講師・飯田泰彦）参加。

第46回竹富町史編集委員会

―議　事　録―

第46回竹富町史編集委員会が、令和５年12月１日午後１時半から午後４時半まで、「全員会議室」(竹富町役場４階）で開催された。冒頭に編集委員長・石垣久雄氏が沖縄県文化功労賞の受賞を出席者一同が拍手で祝した。

石垣久雄氏の挨拶は、竹富島の種子取祭を例として、伝統文化の継承には意識的な取り組みと周囲の激励が大切であると説かれた。続いて、竹富町教育長・佐事安弘氏は、姉妹町である北海道斜里町からの一行の来島に触れ、斜里町の方々にとって、八重山の気候は真夏のようだという感嘆の声が上がったエピソードなどを紹介しつつ、日本列島における南北交流の意義を強調された。

次に本会議の出欠確認が行われた。

出席者は、編集委員長・石垣久雄氏、副委員長・里井洋一氏、新本光孝氏、池田克史氏、西表隆夫氏、上江洲儀正氏、大城肇氏、大浜修氏、島村賢正氏、通事孝作氏、那根真氏、西里喜行氏、花城正美氏、吉川英治氏（以上、編集委員14人）、当局から竹富町教育長・佐事安弘氏、教育委員会社会文化課課長・登野盛恒雄氏、担当事務局から竹富町史編集係・飯田泰彦、米盛恭子、野田有の合計19人（欠席者は編集委員・狩俣恵一氏、三木健氏）。

その後、2023年度の竹富町史編集事業の進捗について、経過報告がなされ、議題に沿いながら、第46回竹富町史編集委員会が慎重審議された。

(1) 『竹富町史　第八巻　西表島』の進捗状況について（報告）
(2) 『竹富町史　第四巻　黒島』の進捗状況について（報告）
(3) その他

議題(1)『竹富町史　第八巻　西表島』の進捗状況について〈部会長・里井洋一〉

『西表島編』〈上巻〉は、いったん版下制作業務を終了しているが、現在いくつかの未定稿が見受けられること、また全体の構成を見直したことにより、原稿差し替え、注記や年表の照合、作図・作表、写真の追加、レイアウトの変更などのデータ修正の必要が生じた。そういったことから、2023年度は『西表島編』〈上巻〉を再構成・修正して原稿を整えることにし、2023年度は印刷・製本業務として、改めて南山舎とデータ修正業務の契約を行なうことになった（11月30日契約)。

〈上巻〉の最終章「西表島の過去・現在・未来」について、９月７日に原稿（大浜修氏、池田克史共著）を受理した。西表島の過去から現在まで総覧し、未来への展望を述べている。

〈下巻〉については、故・石垣金星氏から民俗を中心とした原稿が提出されているが、『西表島編』

の章立てに添って当てはめようとすると無理が生じ、これをどう解釈して構成していけばよいか、また金星氏の思いをどのように汲みとって、「竹富町史」としていかに表現すればよいのかが悩ましいところである。

まずは〈上巻〉の編集に専念し、その発刊後に〈下巻〉の編集に本格的に取り組む見込みである。また、〈下巻〉に「水と電気」の項目が新たに加えられた。

議題⑵『竹富町史　第四巻　黒島』の進捗状況について〈部会長・那根　真報告〉

執筆者の宮良当皓氏、玉代勢泰興氏が逝去されたことにより、編集担当分野、未提出原稿についての担当者を新たに決める必要が生まれた。第10回黒島編専門部会（2023年３月27日開催）後、黒島在住の執筆者との諸連絡などを考慮し、専門部会の組織改編を行なった。委員長は那根真氏、副委員長は西表隆夫氏が互選された。

進捗状況などについては、「黒島編構成＆執筆者分担表」〈総項目第14次案〉（2023年12月）を提示して説明した。原稿は約６割が提出済であるが、これらのなかにはいったん取り下げられたものも含まれている。取り下げ原稿のほとんどは完全原稿に近い。

また、新たに第２章「集落」、第５章第４節「民具」、第14章「黒島に関する資料」の項目を立てることになった。

第２章「集落」について、歴史的な視点で通事神孝作氏が「集落の移り変わり」、那根真氏が「現代の集落」を執筆することに決まった。第３章「歴史」の「戦後のあゆみ」は、主に通事氏の既出原稿をもとに構成する計画である。

第５章「人と暮らし」の（２）「衣と暮らし」については、『竹富町史だより』〈第52号〉掲載の増田昭子氏の研究調査ノート（箇条書き）をもとに、専門部会が原稿化することになった。また、第５章「人と暮らし」について、玉代勢泰興氏から味わい深いイラスト約150点が届けられているが、ここから民具を抽出し、専門部会で原稿を作成し、第４節「民具」を構成することになった。

第10章「交通・運輸・通信」については、原稿のほとんどが未提出であるため、割愛することも考えているが、とりあげられる話題はなるべくコラムとして提示したい。

第13章「人物」について、これまで調査票を関係者に配布したが、しっかり回収できていない。基準を明らかにし、その条件に応じた人物を網羅しなければ、混乱を招くことになるので、注意して取り組む必要がある。

第15章「黒島に関する文献目録」は、『竹富町史だより』〈第44・45合併号〉収載の「黒島に関する資料」に新たな情報を加えて掲載することが決定した。

議題(3)　その他

①　発刊計画について

改めて竹富町史発刊計画を審議し、以下のように見直した。『竹富町史　第八巻　西表島』〈上巻〉について、現実的な進捗状況から、今年度は「版下再構成・修正」を行ない、発刊は来年度行なうということを事務局から報告があった。本委員会では、今後の発刊計画について議論され、次のような計画が承認された。

年　度	刊　　行　　物	備　　考
2023年度	・『竹富町史だより』〈第52号〉〈第53号〉	・『竹富町史　第八巻　西表島』〈上巻〉の再構成・修正作業に伴うデータ修正契約。 →『竹富町史だより』の50号合冊本の刊行については、第43回編集委員会で承認。
2024年度	・『竹富町史　第八巻　西表島』〈上巻〉 ・『竹富町史　第八巻　西表島』〈下巻〉 ・『竹富町史だより　合冊本』〈第１－18号〉 ・『竹富町史だより　合冊本』〈第19－36号〉	・第43回編集委員会で『黒島編』と『自然編』の調整が提案されたが、黒島編専門部会は当初計画通りの発刊を計画。 ・『自然編』『郷友会編』は、原稿が整い次第刊行準備。
2025年度	・『竹富町史だより　合冊本』〈第37－50号〉 ・『竹富町史だより』〈第56号〉〈第57号〉	・2025年度以降、『竹富町史　第四巻　黒島』、『竹富町史　第八巻　西表島』〈下巻〉のうち、原稿が整ったものから刊行準備。
2025年度	・『竹富町史だより』〈第58号〉〈第59号〉	
2026年度	・『竹富町史だより』〈第60号〉〈第61号〉 ・『竹富町史だより　合冊本』〈51－60号〉	
2027年度	・『竹富町史だより』〈第62号〉〈第63号〉	

『西表島編』〈上巻〉について、現状と報告（議題１）をふまえると、発刊計画の見直しが必要とされる。『西表島編』〈上巻〉の進捗について、現在いくつかの課題が見受けられるため、2023年度は『西表島編』〈上巻〉を再構成・修正し、原稿を整えることにする。そして、2024年度に印刷・製本業務を執行し刊行する。

『竹富町史だより』合冊本については、第43回町史編集委員会で第50号までの合冊本刊行が既に承認されていることから、次年度から『竹富町史だより』合冊本発刊の準備を進めたい。構成、内容・体裁、付録の細目は次の表のとおり。

タイトル	内容・体裁	付録細目
『竹富町史だより合冊本』〈第１－18号〉	・第１－18号の合冊。 ・Ｂ５版、620頁。	・竹富町史編集理念・編集構想。 ・通事孝作「竹富町史のあゆみ」（沖縄県地域史協議会編『琉球・沖縄の地域史研究―沖縄県地域史協議会の30年―』〈沖縄県地域史協議会、2011年〉63－69頁収載）に追記。 ・『沖縄県地域史協議会会誌』掲載記事。
『竹富町史だより合冊本』〈第19－36号〉	・第19－36号の合冊。 ・Ｂ５版、620頁。	・黒島寛松著作抄＆目録 ・小浜島に関する資料。
『竹富町史だより合冊本』〈第37－50号〉	・第37－50号の合冊。 ・Ａ４版、620頁。	・『ぱいぬ島じま』『町史だより』掲載写真一覧。 ・人名索引。

今後、10号ごとに（51－60号、61－70号…）合冊本を刊行する計画である。体裁について、各号60頁とすると、各本約600頁が見込まれる。

『竹富町史　第四巻　黒島』（以下、『黒島編』と略記）の刊行については、第43回編集委員会で『黒島編』と『自然編』の刊行順についての調整が提案されたが、黒島編専門部会は当初計画通りの発刊を希望した（第８回黒島編専門部会）。現状をみたとき『西表島編』刊行後の発刊が適当ではないかとの意見が提案され、ひとまずそのようにすることになった。

その他、『自然編』、『郷友会編』、『竹富町史　第十一巻　新聞集成Ｘ』シリーズは、それぞれ原稿が整い次第、次年度予算として申請して刊行することにする。『竹富町史　第十一巻　新聞集成Ｘ』シリーズは1972年まで単年で完結（あと６冊）を計画している。

②　『自然編』について〈報告　部会長・新本光孝〉

部会長・新本光孝氏より「総合目次」（案）の提案があり、章・節・項レベルの内容まで確認された。内容が盛りだくさんであるので、今後はこれらを素材として、どのように見せ、構成していくかが課題として浮上してきた。委員からは、竹富町内の水事情、「水と暮らし」の関係についても言及する必要性が述べられた。

原稿の執筆や資料・写真の提供については、大方の了承を得ているので、公的な手続きを進め、着実に編集を進めていくことが求められた。

③　『竹富町史　郷友会編』について〈部会長・狩俣恵一　報告〉

部会長・狩俣恵一氏より資料が提示され、事務局が代読し、それをもとに慎重審議を行なった。

第38回竹富町編集委員会（2018年）では、『竹富町史　郷友会編』の取り組みにおいて、組織的に編集を進めるため、各島の担当者が決まった。そして、担当者が中心となり、資料収集や諸連絡など、基礎的な作業を行なうことになった。

郷友会に関する資料収集については、竹富島の郷友会を除くと、ほとんどが集まっていないように見受けられる。そこで第42回竹富町史編集委員会（2021年）では、大雑把ではあるが、今後の取り組みの参考として郷友会資料、関連論文資料を提示した。これらをみると、近年、郷友会は学術研究の

対象としても注目されていることがわかり、そちらの資料収集も必要かと思われる。

また、第45回竹富町史編集委員会（2023年８月開催）では、次のメンバーによる専門部会の発足が承認された。『郷友会編』の組織的な運営のため、「竹富町史に関する要綱」（第２条４）に基づき、正式に専門部会を立ち上げることになった。

委員は、狩俣恵一（竹富島担当）、花城正美（小浜島担当）、那根　真（黒島担当）、大浜　修（新城島、西表島東部担当）、島村賢正（波照間島担当）、吉川英治（鳩間島担当）、池田克史（西表島西部担当）、仲本　学（波照間島出身、在東京）、大城辰彦（西表島大富出身、在那覇市）、有田静人（竹富島出身、八重山毎日新聞東京通信員、在東京）である。

2024年７月（または８月）の第47回竹富町史編集委員会までに第１回郷友会編専門部会の開催し（５月、または６月開催予定）、第45回編集委員会に提示された「目次案」を修正・再構成し、執筆者・編集作業の手順を確認したい。

④竹富町史収蔵の写真デジタル化について

「令和５年度沖縄振興特別推進市町村交付金事業」を活用し、社会文化課収蔵資料のデジタル化を進めている。主な内容は、①竹富町文化振興・観光交流拠点整備事業（文化財係）、②ビデオテープ等アナログ資料のデジタル化（文化財係）、③竹富町史保管写真デジタル化委託業務（町史編集係）である。

③について、現在、町史編集係では約35,000枚の写真資料を保有している。しかし、紙の写真資料は経年劣化の可能性が高く、早急なデジタル化の必要に迫られている。今回は、保存状態の悪い資料、及び活用頻度の高い資料（西表島編、黒島編への活用）約１万枚のデジタル化を優先的に進めていくことになった。

デジタル化した写真資料は、竹富町のホームページでの公開を視野に入れて取り組んでいる。また、国や大学などのプラットフォームにおいても公開することにより、本町を広くＰＲすることが可能となる。データ化済の保管アルバム（竹富島、小浜島、黒島、鳩間島）４地域の写真については、データ化はされているものの基本データ（撮影した場所や時間、内容など）の整理が不十分であり、今後整備していく必要がある。

その他、既刊書の在庫数を報告した。また、米盛恭子から、台湾調査の報告があった（本号参照）。

竹富町史刊行物一覧表

令和３年３月現在

No.	書　　籍　　名	発　行　年	頒価（本体）
1	竹富町史　別巻②　竹富町史文献目録	1990年	無料配布
2	竹富町史　別巻③　写真集「ぱいぬしまじま」	1993年	¥2,500
3	竹富町史　第十巻　資料編「近代１－喜宝院蒐集館文書」	2005年	¥2,500
4	竹富町史　第十巻　資料編「近代２－必要書・必要書類集」	2002年	¥2,500
5	竹富町史　第十巻　資料編「近代３－新城村頭の日誌」	2006年	¥2,500
6	竹富町史　第十巻　資料編「近代４－官報にみる八重山」	2007年	¥2,500
7	竹富町史　第十巻　資料編「近代５－波照間島近代資料集」	2009年	¥2,500
8	竹富町史　第十一巻　資料編「新聞集成Ⅰ」	1994年	¥2,000
9	竹富町史　第十一巻　資料編「新聞集成Ⅱ」	1995年	¥2,000
10	竹富町史　第十一巻　資料編「新聞集成Ⅲ」	1997年	¥2,000
11	竹富町史　第十一巻　資料編「新聞集成Ⅳ」	2001年	¥2,000
12	竹富町史　第十一巻　資料編「新聞集成Ⅴ」	2003年	¥1,600
13	竹富町史　第十一巻　資料編「新聞集成Ⅵ」	2004年	¥2,000
14	竹富町史　第十一巻　資料編「新聞集成Ⅶ」	2019年	¥2,000
15	竹富町史　第十一巻　資料編「新聞集成Ⅷ」	2021年	¥2,000
16	竹富町史　第十二巻　資料編「戦争体験記録」	1996年	¥3,000
17	竹富町制施行50周年記念誌「ぱいぬしまじま50」	1998年	¥2,500
18	竹富町史　資料集①「鉄田義司日記」	2000年	¥1,500
19	竹富町史　第二巻「竹富島」	2011年	¥3,000
20	竹富町史　第三巻「小浜島」	2011年	¥3,000
21	竹富町史　第五巻「新城島」	2013年	¥3,000
22	竹富町史　第六巻「鳩間島」	2015年	¥3,000
23	竹富町史　第七巻「波照間島」	2018年	¥3,000

＊23『竹富町史　第七巻　波照間編』は2022年に初版第２刷発行。

編集後記

今年度最終となる『竹富町史だより』〈第53号〉をお届けいたします。表紙には新城島の黒島家４姉妹「パナリワラバーズ」の写真を掲げました。本号の巻頭には文化人類学者で新城島を対象とした研究で知られる、植松明石氏の資料の台湾調査に参加した報告、さらに「新城島に関する資料」の目録を掲載したところ、さながら「新城島特集号」と化しました。

また、アジア・太平洋戦争後の資料として掲載した、古藤實富「惨状黒島を訪う」、「一九六〇年会務書」（大原公民館所蔵）、「斜里町と姉妹町盟約に関する新聞資料」の三つの資料は、竹富町の歴史が記された資料の少ない時代において、地域の実態を知る手掛かりとなる貴重な資料といえます。とりわけ「一九六〇年会務書」は、これまた新城島とリンクしてきます。

前号『竹富町史だより』〈第52号〉で、〈特集〉「斜里町との交流史」を掲載したところ、お読みいただいた斜里町立知床博物館学芸係の三枝大悟氏より「書評」をいただくことができました。私たちが手がける『竹富町史だより』や『竹富町史』について余すところなく紹介いただいた三枝氏の文才に感動するとともに、そのまま載せた復命書を、「楽しい！」と評価してくださって一安心いたしました。さらに斜里町の教育委員会及び知床博物館からは、多くの資料や冊子をご寄贈いただき、2023年度中に町史編集委員会にご寄贈いただきました全体の寄贈資料とは別に、「姉妹町斜里町からの寄贈図書一覧表」としてまとめました。ご寄贈くださいました皆様、ありがとうございました。

そのほか、西前津松市（社会教育指導員）に、波照間島を題材とする「燐鉱石の権威 波照間燐鉱で頓挫・幕引き」、「バジィラの両義性」の２題を寄稿いただきました。

「《デンサ節》とその背景」では飯田泰彦（町史編集係）が、教訓歌として知られる《デンサ節》の時代背景を検証しつつ、時代に沿った歌詞の内容をユーモラスに解説しています。《デンサ節》が、後世に歌い継がれ受け継がれていくように、『町史だより』も時代を繋ぐ架け橋として、地域に役立つ情報を掲載していけたらと思います。

（米盛恭子）

2024年２月28日発行

竹富町史だより

第53号

編集発行　竹富町教育委員会

沖縄県石垣市美崎町11－１

TEL　0980－87－6257

e-mail : taketomi-choshi@town.taketomi.okinawa.jp